
双子の妹は純粋種!?

フィロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

双子の妹は純粋種！？

【NZコード】

N4716T

【作者名】

フィロ

【あらすじ】

初めてまして織斑十夏です。織斑一夏は双子の兄になります！！！
〇〇と一夏のクロス書いてみました。気に入つていただけると嬉しいです。

第1話「初めまして」

「初めまして。私の名前は織斑おりむらとうか十夏。今年で十五の元気な恋する乙女です！……！」

元気に挨拶。これは基本中の基本。ちゃんと練習もしたし、ミスもしていない、完璧。そう思つてクラスを見回すも、そこまで反応してくれない。何故だろ？ やはりもう一押し必要だろ？

「ええっと、家族構成は双子の兄が一人と少し歳の離れた姉が一人です。あ、二人ともこの学園にいます」

そういうと、クラスの視線が集まる。うう、なんか寄せパンダみたいに扱つたお兄ちゃんとお姉ちゃんに罪悪感が。

ええっと、先ずは現状報告……私がいるのはIS学園という場所です。え？ ISって何？ ええっとISというのはですね。簡単に言えば『世界最強の兵器。ただし女性にしか扱えない』というピーキー極まりない物です。まあ、お兄ちゃんという例外がありますけど。このISを製作したのはお姉ちゃんの知り合い、というより悪友の篠ノ之 束さんです。実は公式に発表されてしませんが、ISの製作には束さんだけでなくもう一人。関わっている人がいるんですけど本人曰く『僕が関わると色々、面倒なことになる』といって自分のこと隠しています。まあ、本人が良いと言うなら私は全然構いません。その方がライバルも少なくなりますし。

「質問？」

「はい、何でしょう？」

「織斑さんの家族つてやつぱり、千冬先生と一緒に一組の一夏君?」

「はい、そうです」

そう答えると、クラスの皆が騒ぐ。つん、やつぱり一人は有名だな。

「更に質問。さつき恋する乙女って言つてたけど。そこを詳しく」

好奇心旺盛な女性徒が聞いてくる。むむ、やはり聞いてくるか。ではお答えしましょう。

「私が恋している人はティエリア・アーデさんです」

私の声がクラス『一年二組』に響く。さあ、今日から楽しい学園生活の始まりだ。大丈夫。どんな困難があつてもティエリアさんから貰つたIS『ヴァーチュ』と私の『イノベイター（ティエリアさんが言つてたけど私にはやつぱり）』としての能力があれば問題なし。

「織斑さん一ついい？」

「はい？」

その声に視線を向けると、綺麗な茶髪を三つ編みにして腰まで伸び、顔にそばかすがある女子が立つていて。なんというか、凄く勝気な人だ。

「貴女。ISの経験は?」

「えっと、試験のときだけかな?」

私の言葉を聞いてその人はニヤリと嫌な笑みを浮かべる。

「そう、かの『ブリュンヒルデ』を姉に持っていると期待したんだけど。期待外れみたいね」

その言葉にムツとする。

「それって酷くない? というよりその私のほうが貴女より優秀です。つていうのは早計じゃないの?」

私の言葉を目の前の女性徒が鼻で笑う。

「そりか? エスでもどんな物でも要は経験が物を言うのよ? 確かに私は各国の代表候補生やここにいる先生方よりもエスの経験は低いわ。けど、貴女より上なのは確か。なんなら試してみる?」

その挑発的な言葉に私は我慢できなくなる。

「じゃあ、試そうよ? 言つとくけれど私、強いからね?」

挑発には挑発。相手のほうも少しムツとしたのか。

「その言葉。忘れないでね? それと唯の勝負じやつまらないから。勝ったほうがクラスの代表ってことにしましょうか。先生もそれでいいですね?」

女性徒の言葉に先生がため息を吐きながら了承する。その後、試合は一週間後に決まった。奇しくもその試合はお兄ちゃんのクラス

代表を決める戦いの日と同じだった。

第1話「初めまして」（後書き）

何を書いているんだ私は。○・○・○

どうも、今回の新作は些かブームに遅れた『IS』です。主人公は一夏の双子の妹、十夏です。性別、キャラ共に今までの主人公からかなり離れたキャラですが、実際書いてみると中々楽しい。他に作品ともども頑張つて執筆していくたいので応援お願いします。

第2話「現状報告」

「というわけです」

『いきなり実戦とは。まあ、君らしいといえば君らしいが』

場所は寮の自室。一人部屋だがもう一人はまだ部屋に帰つてない。暇なのでティエリアさんに現状報告をしているのだ。

『まあ、早くヴァーチュに慣れるに越したことはない。それにヴァーチュの性能と君が持つイノベイダーとしての能力を發揮すれば、問題はないだろう』

「ティエリアさん。そのイノベイダー、詳しく教えてくれませんか？私が知っているのはこの目だけですし」

そういうて、意識を集中する。すると、私の目が金色に輝く。

『そうだな。そろそろ君にも話していい頃合だらう。君とタバネ、チフユに話したが、僕は遠い未来の人間なのは知っているね？』

「うん」

頷く。そう、ティエリアさんは未来の人間なのだ。それを知つたのは十年前。家の近くにある公園で倒れていたティエリアさんを保護した後、その場にいた私とお姉ちゃん、束さんにティエリアさんが伝えたのだ（お兄ちゃんは篠さんと道場にいたので知らない）。

『僕たちのいた時代から三世紀ほど前に一人の天才科学者、イオリ

ア・シユヘンベルグが提唱した進化した人類。それがイノベイターだ。イノベイターは状況把握能力、空間認識能力、脳量子波、俗に言えばテレパシーによる意識の共有などの能力がある。他にも細胞の変化による肉体の強化、人間の倍の寿命など、様々な恩恵を得ている。本来、イノベイターは高純度のGN粒子を浴び続けることで、通常の人間が変革し発生する』

「GN粒子ってあの緑色の粒子だよね？ 束さんと一緒に研究していった」

『ああ、君がイノベイターに覚醒したのは僕たちの研究を最も近くで見ていた事も原因の一つとして考えられるが、それだけでは説明がつかない』

「だよね。その理屈で言つと、私よりも束さんが覚醒しやすいもんね」

そういつて、笑う。

『だが、現実として君だけがイノベイターとして覚醒した。物事にはイレギュラーは付き物だが。君の場合、恐らく元々の素質があったのだろう。それも刹那を超えるほどの』

「刹那さんってティエリアさんの仲間で私と同じイノベイターの？」

刹那、という人物は私がイノベイターとして覚醒した時に聞かされた人物だ。

『そうだ。けれど、君と刹那ではかなり立場が違う。君と彼では浴びた粒子の量や純度も異なる。けれど、君は刹那より純度が低く且

つ量が少ない粒子で覚醒した』

「それだけ、私の存在が異常なんですよね？」

『言いながら、自分の発言に凹む。これでは化け物の様だ。それを察したのかティエリアさんが咳払いする。

『そう悲観することでもない。逆に誇つていいんだ。君は人類から進化した存在なんだと』

「それは……そうですけど」

『君の言いたいことも分かる。けど、事実は事実だ。それを受け入れるか、拒絶するか。それは君次第だ』

それを聞いて、私はため息を吐く。

『そうですね。此処でウダウダ考えたって私がイノベイターである事実は変わらない。だったらイノベイターとして『来るべき対話』に備えなきや！！！！』

そういうて、立ち上がる。が、足を滑らしてベッドから落ちる。

「あう～」

『フフ、そういうポジティブな所が君の魅力だな。だが『来るべき対話』は人類の意思が統一し、尚且つ外宇宙に旅立てるほどの技術力が無ければ実現できない。まだイノベイターの出番は無いよ。君は学園生活に専念しなさい』

「はあ～」

痛む頭を摩りながら返事をする。

『ではそれから切るよ。一時間も用事があるのでね』

「はい、ティエリアさんも頑張ってください」

そういうで、電話を切る。そして携帯を机に置くとベッドに寝転がる。

「久しぶりにティエリアさんと電話しちゃつた～」

そういうて、枕を抱きしめ、ベッドの上を転がる。

「相変わらず、綺麗な声だな～。それにしても、今何処にいるんだろ～。この前はイギリスにいたからまだいるのかな？それとも、他の国？」

彼は色んな国を飛び回っている。理由は謎だが。理由も無く動く人ではないのは確かだ。

「君は学園生活に専念しなさい、かあ～」

そういうで、両足を上げ、反動を付けると、立ち上がる。

「やういえば、お兄ちゃんに会つてないけ

最後に会つたのは三田中学前、何処にいるかは事前に聞き込みで分かつてこる。

「男はお兄ちゃんだけだからね~」

部屋を特定するのは難しくなかつた。早速、会いに行こうとしたアラを開ける。どうやらまだ同居人は来ていない。

「つ、ん、同じ部屋の人も合鍵はある筈だから、鍵は閉めて大丈夫だよね」

言いながら、鍵を閉め、歩き出す。

通路を歩いていると、部屋の前で頃垂れているお兄ちゃんを発見。なにやら元気が無さそうだ。取り敢えず、元気付けよう。そう思い、お兄ちゃんに気付かれないよう注意しながら走る。そしてお兄ちゃんが気付く寸前、勢いよく跳躍する。

「ん?」

「イノベイター キイイイイイック!...!...!...!」

「うわー!」

飛び蹴りが上手い具合にお兄ちゃんの腹部に深くめり込む。

「 もう、そんな暗い雰囲気じゃ彼女の一人も出来ないよ?まあ、お兄ちゃんほど朴念仁じや出来るかどうかも怪しいけど。あれ?お兄ちゃん?」

笑顔で言つも、お兄ちゃんからリアクションなし。不思議に思つて見ると、ピクピクと痙攣しているお兄ちゃん。

「 うん、御免。まさか、それほど威力あつたなんて」

恥のべし、イノベイターの身体能力。

「相変わらず、いきなりだな。十夏」

「 相変わらず、リターン早いよね。お兄ちゃんは」

ついで、立ち上がるお兄ちゃんに手を貸す。すると、ドアが開き。見覚えのある人物が出てきた。

「あ、篠さんだ。久しぶり~」

「 十夏か。久しぶりだな」

その後、立ち話もなんだから、とお兄ちゃんが部屋に私を招き入れた。私としては嬉しいのだが、もう少し篠さんの事を考えたほうがいいよ?

「ええつ？—イギリスの代表候補生と試合するの？—？」

「お、おひ」

私の大声にお兄ちゃんが頷く。私は大きくなため息を吐く。
「バカだ、バカだと思つていたけどまさか実力の違いも分からずに喧嘩売るなんて」

「それならお前だって同じだろ？」

お兄ちゃんが不満げな顔で反論する。

「あのねえ、私が戦う相手は普通のHS操縦者。お兄ちゃんが相手をするのは国を代表するIS操縦者。実力からして全然違うの」「国籍が違うだけじゃないのか？」

その言葉に私と籌さんがため息を吐く。

「筹さん。お兄ちゃんに分かりやすく。且つ、理解しやすいように説明お願いします」

私の言葉に籌さんが頷く。

「そうだな。剣道で言つなら十夏の相手は精々、三年も稽古をサポートお前。逆に一夏の相手は私くらいの実力だと言えば、納得するか？」

「ああ、うん。納得した」

そういうて、頃垂れるお兄ちゃん。

「篠さん。お兄ちゃんが中学の時、剣道やつてないの、知つてたの？」

「本人から聞いた。まあ、それは私が何とかするとしよう。問題は十夏の方だが」

「それは大丈夫。私も私でちやんと考えてあるから」

そういうて、笑う。

「本当に大丈夫か？」

「心配性だな、お兄ちゃんは。もう少し私を信じてくれてもいいんじゃない？」

そういうて、椅子から立ち上がる。

「それじゃ、そろそろ部屋に戻るね」

そういうて、部屋を出る。つと、そつだ。忘れるといひだつた。

「お兄ちゃん。私がいないからつて篠さんにエツチな事しちゃ駄目だよ？」

「なつ？！」

「流石に俺もそこまで命知らずじゃねえよ」

「一夏、それはどういつ意味だ？」

なにやら不穏な空気を醸し出しているけど、別にいいか。私は自分の部屋へと戻るのであった。

「ふむ、いきなり実戦とは。まあ、彼女なら問題は無いか」

そういうて、椅子に背を預ける。携帯を置いてある机には通常より大きめのPCが自動で作業をしている。窓から見える外は雨が降つていて。

「ん？」

ふと、携帯の隣にあるコーヒー カップの中身がない事に気が付く。

「買い置きはまだあつた筈だが」

そういうて、キッチンの戸棚を開ける。案の定、新品の「コーヒーがあり、一人分作る。そして椅子に座りなおし、一口飲む。その時、携帯が鳴る。手に取ると非通知だった。

「？」

取り敢えず、通話ボタンを押す。

『はあ～い。もしもし～？皆のアイドル、篠ノ乃 束さんだよ～』

幸せ全開。元気一杯の声に呆れる。

「今日ははどうした？それより。いい加減、非通知で掛けてくるのは止してくれ」

『わお、ティエリ～は平常運転で束さんも安心だね～。そんなティエリ～に束さんから～』依頼だよ～。嬉しい～？』

『嬉しくありませんね。これでも僕は現在進行形で忙しい。三ヶ月ほど後にしてくれると助かるのですが？』

『残念。後、一週間以内に届けないと間に合わないんだよね～』

一週間以内？

「その届け物はもしや？」

『お？興味出てきた？やつぱり？だよね～』

「正直に答える。それは『僕と君が』共同で開発した」

『そりだよ～。ティエリ～が技術提供してくれた例の粒子をT.Sに動力源として加えた試作品がジュウちゃんに渡したヴァーチェだよね？これはそのデータを基にティエリ～と私で作った最新版！！！』

！持つて行く場所は勿論！――『

「I.S学園か。だが、そんな所に無名の僕が入れるとは思えないが？』

I.S学園の警備は厳重。それを未確認のI.Sを持って入るのは無謀だ。

『はっはっは。この束さんの辞書に不可能なんて文字はないんだよ――まあ、辞書なんて持つてないけど。取り敢えず、この束さんを信用してね』

そう言われ、確かにこの女性に掛かれば僕一人位、簡単に学園に入らせることが造作も無い。

「いいだろう。僕もI.S学園には少なからず用がある。だが、一つ答える』

『何かな？』

「何故こうも、僕を信用する？あの時も言つた通り、僕はこの時代の人間じゃない。いや、そもそも僕は嘘を付いているかもしない。何故、君は僕を信用する？』

『信用なんてしてないよ』

即答だった。そして彼女は楽しそうに続ける。

『私がティエリに協力してるのは楽しそうだったから。ティエリが教えてくれた未来の歴史も兵器も。そして一緒にいて、今借り

ているハロの中にあつたGN粒子も束さんの興味を惹くには十分だもん。それにまだティエリーは私に隠し事してるでしょ?』

「当然だ。全ての情報を開示するメリットなど僕に無い」

『でしょ?そこがミソなんだよね。因みに束さんはラーメンなら醤油が好みなんだけどね。つまりまだ開示されてない秘密を考える楽しみが出来るわけ、これって中々楽しいよね?答えがどれだけティエリーの真実に近いか。それを考えるだけでも束さんの暇つぶしには丁度いいんだよ。納得した?』

まったく、この女性は言つて事欠いて暇つぶしとは。僕はため息を吐いて。

「一応は納得しました。依頼は受けよう。それと」

『何かな?』

「チフコには言われていると思つが。ぐれぐれも『やりすぎ』ないよつに」

『りょうかーい』

そういうつて、電話が切れる。机に携帯を置き、深く息を吐く。

「全く厄介極まりない女性だ」

正直、苦手だ。昔も今も。そして顎に手を当て考える。

「やはり此処は僕が知つてゐる地球の歴史ではないか」

そもそも、IRSといつのもその開発者である彼女も僕がいた歴史には存在しない。つまりこの世界は平行世界と考えたほうがいいだろ。

「それにしてもやはり彼女は凄い」

文句なし、世辞抜きでイオリアよりも天才として上だろ。だが、彼が持っている思想を彼女が理解することは無いだろ。

「何故なら、彼女は自分の興味のみに傾く人間なのだから」

彼女は興味がある人間以外はそれこそ、道端の石程度の認識しかない。それがどうしてイオリアが掲げた思想に賛同しようか？

「まあ、僕は僕の出来ることをしよう」

「コーヒーを飲み干し、立ち上がる。そういうえば、あのIRSは誰に使わせるのだろうか。

「確かに、名前は『白式・七剣』だつたな」

呟いた途端、外で何か重い物が落下した様な轟音が響いた。それに僕はため息を吐きながら外に向かう。

第2話「現状報告」（後書き）

更新！…お待たせしました！！今回はティエリア顔出し。劇場版ラストで出てきたイオリアと似たような生活をしています。そして白式ですが、若干変更しています。やっぱ〇〇とのクロスなら主人公のIISもそつちよりの方がいいかな、と思いまして。では次回更新をお楽しみに。

第3話「初陣」

「ん~!~!~ 気持ちのいい朝だね~」

そういうて、私はベッドから降りる。

「試合を前にしている人間とは思えない状態ね」

呆れた様に言つたのは私の同居人で同じクラスの柿崎速華^{すみ}_か。女性では大柄な体躯で性格も大らか、更に胸も大きい。何だろうか、体が大きければ全体的に大きいのだろうか?そしてステーキとパインサラダが大好物のルームメイトだ。

「絶対に追い抜いてやる!~!~!~」

「いきなり、私の話題に入つたね」

そういうて苦笑する速華。その後、食堂で朝食を取り、授業を受ける。

「いいか

「?

先生であるお姉ちゃんの言葉を聞き流しながら、窓の外を見る。

天気は快晴。雲ひとつ無い晴れだった。

ふと、視線に気付く。それとなく見ると、今日戦う一条光^{ひかり}が私を見ていた。それを見た後、もう一度窓を見る。

「緊張……ねえ」

小ちく咳く。正直、試合自体に不安は無い。あるとすれば果たして自分に、ヴァーチュを使いこなせるかどうか。幾らティエリアさんにイノベーターだ、人類の革新だと言われた所で実感が無い。もしも、自分に、ヴァーチュが使いこなせず、無様に負ければティエリアさんだけではないお兄ちゃんやお姉ちゃんの顔に泥を塗ってしまう。それだけは絶対にしたくない。ならば、勝つだけだ。

「よし、頑張るぞーーー！」

「気合を入れるのはいいが。その前に授業を聞け」

お姉ちゃんの声が聞こえたと思ったら、パン、と拳骨で殴られた。物凄く痛いです。

「全く、彼女の用意周到さは驚きだな」

そういうて、僕は自身の服装を確認する。仕立てのいいスーツだ。そして胸には顔写真付きの名札。そこには『倉持技研』の名前。

「成る程『白式・七剣』は表向き『倉持技研』で作っているという事にしているのか。そして僕が『白式』を作った部署の最高責任者

ところ立場か

最も『白式・七剣』も僕も『倉持技研』とは一切関係ない。全てタバネが偽造した情報だ。

「まあ、お陰で僕も堂々と学園に入れるのは幸いか」

そういうて、作業している人間に指示を出し。試合が始まる場所に向かつ。

「どうやら今日は一試合あるのか。一つはトオカの試合としてもう一つは」

そういうて、考えていると入り口から誰かがやってきた。

「あ、あの……『倉持技研』の人ですか？」

なにやらかなり慌てている。容姿は美人だが、どちらかといつと可愛い、という感じのメガネを掛けた女性だ。僕は頷き。

「はい。『白式・七剣』を持つてきました。それで、何処に運べば宜しいでしょうか？」

「あ、えっと。こちらです……！」

彼女に案内され、作業員と共に向かつ。そして向かつた先で少し驚くも、そこにいた面々が懐かしく思つ。

「久しぶりだな。最も、僕をちゃんと覚えているのはチフコとトオ力位か」

「テ、ティエリ亞さん！？」

「さなり現れたティエリ亞さんに驚く。ティエリ亞さんは私を見ると。

「トオカ。そろそろ試合なのだろう？準備しなくていいのか？」

「え？ は、はい！！！」

言われ、準備する。といつても、ISの起動だけなのだが。

「ヴァーチュ…………」

眩ぐ。すると、髪留めが光り、若草色の光が私を包む。

「おお…………」

十夏の体を若草色の光が包み、それが消えると十夏の姿が変わっていた。白を基調としてゴツゴツとした分厚そうな装甲。背中には若草色の粒子を出すコーンがある。両肩には砲塔が一つあるキャノン砲。そして右手に大きなバズーカを持っている。既存のIISとは違い、体全体を覆う全身装甲^{フルスキン}と呼ばれる物だ。

『「うう～ん』

十夏が不満げに唸る。

「どうしたんだ？」

『やつぱり太つて見える』

そういうで、肩を落とす十夏。それにため息を吐くティエリア。

「我僕を言つたな。ヴァーチュは重装甲と高火力の砲撃戦型のIISだ。まったく何故、そんなピーキーなIISにしたんだ。他にも候補があつただろうに」

『いやあ～、なんか運命的なモノを感じちゃつて』

そういうで、左手で後頭部を搔く十夏。IIS越しだとショールなだけだ。

「準備が出来たなら、さっさとアリーナに入れ、相手が待ちくたびれているぞ?」

『了解です』

そういうって、十夏はアリーナの方に向きを変える。

『それでは……織斑十夏。ガンダムヴァーチュ……行きます！……』

叫びと共にヴァーチュが飛び出し、十夏がアリーナに向かう。俺たちは直ぐに空中に浮かぶディスプレイを見る。そこにはヴァーチュを纏つた十夏とリヴィアイブを纏つている生徒が対峙していた。

「それが貴女のHIS？」

『うん。ヴァーチュって言つんだ。えっと、一條さんのリヴィアイブは少し違つね』

一番に皿を引くのは両足、両肩、そして背中に付いてあるスラスターだ。

「ええ、私のリヴィアイブは高速戦闘用にチューインしたHISなの。貴女は見た所、装甲を重点的に強化して機動力を削いでいるみたいね？」

『うそ、そうだよ。まあ、それだけじゃないんだけどね』

そういって、右手に持っているGNバズーカを向ける。

『それじゃ、そろそろ始める?』

「そうね。始めよつか」

その言葉と共に試合開始の合図がアリーナに響く。

「それ！！！」

開始の合図と共に、一条せんがミサイルを飛ばす。

『ノルマニカ』

言葉と共にミサイルの一角にGN bazー力を放つ。ピンク色のビームが狙い違わず、ミサイルを撃ち落し、小さな空間を空ける。そこ通り抜け、ミサイルをやり過ごす。

「甘いわね！！」

その言葉と共にアラームが鳴る。その方向を見るとやり過ごしたミサイルが不規則な軌道を描きながら向かってくる。

『嘘！？誘導性なの！？』

「どうか、考えてみればミサイルは誘導するものだ。こんな感じや、お兄ちゃんを馬鹿に出来ない。そう思いながら動く。そして速度を維持しながら後ろを向き、ミサイルを撃ち落す。そういうえば彼女は何処だ？そんな事を考えた瞬間、悪寒がした。

上！？

言葉と共に、ヴァーチュの肩に装備されたGNキャノンで直上を攻撃する。そこには驚いた顔をしている一條さん。

「意外と勘がいいみたいね。でも……！」

そういうて、HISを肩のスラスターを使つて回転させ、ビームを避ける。

「まだまだあつ……！」

同時にミサイルが多数、放たれる。

「おまけえつ……！」

更にミサイルの合間を縫つよつに銃弾が迫る。

『そんな物……！』

私はヴァーチュの背部と両脚部に備え付けられている装置を起動する。瞬間、その場所から大量の粒子が飛び出し、ヴァーチュを取り囲む。

「ディスプレイでは相手のミサイルの爆発に飲み込まれるヴァーチュエが写っていた。まさか、やられたのか？」

「ふん、性能に救われたな」

後ろで千冬姉が呟く。すると、ディスプレイに変化があった。

「なつー!？」

隣の篠が驚いている。勿論、俺もだ。煙が晴れ、そこに無傷のヴァーチュエがいた。しかも、その無傷の理由が。

「バリア……かよ」

呆れてしまふ。ヴァーチュエの周りには若草色の膜が囲んでいる。そんな物を持つていたなんて。

「GNフィールド」

壁に背を預けていたティエリアさんがディスプレイを見ながら喋る。

「背部と両脚部に設置されている大型のGNフィールド発生器により、GN粒子を自らの周りに固定させ攻撃を無効化する。ヴァーチュエの特徴だ。しかも既存のISが装備している武装ではフィールドを抜けることはまず不可能

「正に鉄壁の守りか。だが、それほどの防御力ならエネルギー消費も馬鹿にならないだろうに」

千冬姉の言葉と共に、ヴァーチュの周りにあったフィールドが消える。そして、ヴァーチュの反撃が始まった。

「チイツ！！」

一條さんが舌打ちをしながらビームを避ける。そして避けながらこっちに攻撃を仕掛けてくるが、それを避ける。流石にさつきは仕方なかつたけど、あんまりフィールドを使ってエネルギー切れは笑えない。

『流石に高機動型。当たつてくれないか』

そう、じちらの攻撃を危なげながら一條さんは避けている。まるで背中に田があるのか、と錯覚してしまつくらい。彼女は私の攻撃を避ける。

『そこ！――！』

後ろを取り、GNバズーカを撃つ。そして撃つた瞬間、彼女が笑みを浮かべていた。

「ぐうつ……..」

突然、スラスターを前に移動させ、急制動を掛ける。そしてビームが当たる瞬間、上空に飛び上がった。

『嘘！？』

慌てて、私もブレーキを掛けるけど、遅かった。顔だけ振り向き、私が見たのは逆さになつた体勢でマシンガンを構え、笑みを浮かべている一條さんだった。

「遠慮はいらないわ。全弾受け取りなさい……！」

叫びと共にリヴァイブの全兵装が私に向かつて殺到した。

背後を取られたヴァーチュエがリヴァイブの一斉射撃を受け、爆炎に飲み込まれる。

「十夏…………」

流石に千冬姉も十夏の名前を呼ぶ、その頬を汗が伝う。瞬間、煙の中から先程よりも太いビームが飛び出し、相手に命中した。

「なつ！？」

絶句する篠を横目で見ながら俺はディスプレイを見る。

『勝者 織斑十夏』

アナウンスの声と共に煙が晴れ、そこには両肩の装備が外れたヴァーチェが浮かんでいた。

「成る程。攻撃が来る直前、GNキャノンを外し、盾に使ったのか。そして爆発を利用して距離を置き、砲撃。考えたな」

ティエリアさんの解説が終わると共にヴァーチェが戻ってきた。

危なかつた。あの時、咄嗟にGNキャノンをページしてなかつたらやられていたかもしね。

「やつたな、十夏」

お兄ちゃんが笑いながら近づく。

「ううん、ギリギリだよ。それに今回はヴァーチェの性能に助けられたから勝てただけ。私自身の力なんて大したこと無いよ」

そういうで、苦笑する。すると、誰かが私の頭に手を乗せる。見るとお姉さんが微笑んでいた。

「確かに今回はISの性能に頼つて得た勝利だが。お前が勝ち取つた勝利には違ひない。それと謙遜と卑屈は違う。お前はもつ少し胸を張つてもいいんだぞ？」

そう言われ、嬉しくなる。ふと、ティエリアさんの方を見ると、ティエリアさんは優しく笑つていた。

「次はお兄ちゃんだよね」

「ああ、俺も勝つてやるぜ」

そういつで、ティエリアさんが持つてきたISに向かう。

ISを身に纏う。なんというか、物凄くしつくり来る。

「どうだ？ 何か不具合があるなら、言つてくれ」

「いえ、全然。むしろ、丁度いいです」

そういうと、ティエリアさんが頷く。

「JのISだが基本的な所は既存の物とそつ変わらない。違いがあるとすれば、動力炉周りがヴァーチュと同規格位だ」

「え？ じゃあ、俺にもあのフィールドを使えるんですか？」

俺が聞くと、ティエリアさんが顎に手を当てる。

「可能だが。かなりエネルギー消費が激しい。そうそう頻繁には使えない。使えるとしても十秒持つかどうかだ。だが、その代償に防御力は折り紙つきだ」

成る程。使えるには使えるが、過信はしない方がいいみたいだな。次に俺の目の前にディスプレイが浮かび上がる。そこには『白式・七剣』の画像があった。

「次に簡単な説明だ。この『白式・七剣』はその名の通り、武装が七つの剣だけに限定された近接特化の機体だ」

「射撃武器は無いんですか？」

十夏が聞く。確かに俺も射撃武器は欲しいと思うが。

「残念だが、特殊な訓練をしていない彼に射撃武器を持たせるメリットが無い。トオカのヴァーチュはその所をサポートしてくれるOSがあるから問題ないが。彼の場合、それ自体を捨て、余った容量を七つの剣にしたんだ」

そんなに凄いのか、この剣。

「次に武装の説明だ。七剣の種類だが、まず腰にある長短二本の実体剣『GNロング・ショートブレイド』これは手を持つて、使うことも勿論だが。腰の武装ラッチに固定された状態で刀身を前方に回転させることも出来る。これにより、不意に近づいてきた敵に対し

て奇襲も出来る」

言葉と共にディスプレイに表示された『白式・七剣』の腰部が点滅する。

「次にGNビームサーべルとGNビームダガー。ビームサーべルは近接用。ダガーは投擲用として使える。エネルギーを調整してダガーとサーべルを分ける事が出来る。デフォルトの設定では両肩後部に装備された二基がサーべル。腰背部に装備された二基がダガーとなっている」

ティエリアさんの指摘した場所がそれぞれ点滅する。

「そして最期の七本目。GNソード『雪丘式型』そしてこの剣だけでなく全ての剣にある能力が備わっている」

「ある能力? それって何ですか?」

俺の言葉にティエリアさんが薄く笑う。

「それは君自身が確かめたまえ」

教えてくれたってバチは当たらないんだけどな。

「その機体のデメリットだが、エネルギー消費が激しいこと。性能に過信して突っ込むと直ぐにエネルギーが切れるので無理をしないことだな」

言われ、絶句する。幾らなんでもそれは酷すぎないだろうか。

「おつと、僕に文句を言つのは筋違いだ。確かに表向き、僕が『白式・七剣』開発の最高責任者と言われているが、実質僕が協力したのは動力炉であるGNドライブ、そして武装の技術提供だけだ。武装システムを発案したわけではない」

そういうて、説明は終わりだ、と言わんばかりにディスプレイを閉じる。

「まあ、君なら使いこなせるだろ。何せ、彼女の弟なのだからな」

そういうて『白式・七剣』の装甲を叩く。俺はため息を吐く。

「一夏」

「なんだ、篠？」

今まで黙つてた篠が近づいてきた。

「絶対に勝てる」

短く篠が言つ。俺は笑つて頷く。

「ああ、任せなー！」

そういうて、俺は『白式・七剣』を操り、アリーナに向かつた。

第3話「初陣」（後書き）

どうも、今回は十夏の戦闘だけです。そしてヴァーチュは思つとこ
ろがあり、フルスキンです。そしてオリキャラですが、さて元ネタ
分かる人いるかな？意外と有名ですが、結構昔ですしね～。さて今
回『白式・七剣』の能力ですが、特に変更点は無いです。零落白夜
もちゃんとあります。そんな中で流石に残りの六つの剣もなんか、
あつた方がいいなと考えてます。まあ、デメリットが零落白夜と同
じかそれ以上にしないと駄目なんですが。さあ、次回は一夏対セシ
リアです。少し原作とは違う戦闘にしてみるのでお楽しみに

第4話「射手と剣士」

空中に浮かぶディスプレイにはお兄ちゃんと対戦相手が対峙していた。

「対戦相手のセシリ亞さんだっけ？ あの人のエラつてどんなタイプ？」

ふと、隣にいる篠さんに聞く。

「確か、ブルー・ティアーズという名前だった筈だ」

いや、名前はこの際、どうでもいいんだけどな。まあ、篠さんも詳しく知らないみたいだし。

「ブルー・ティアーズ。第三世代のI-Sで射撃に特化した機体であり、第三世代兵器。通称『BT兵器』のデータをサンプリングする為に開発された実験・試作機という意味合いが濃い。見た目通り、中～遠距離を得意とした機体だ。火力はヴァーチェに劣る分、機動性が高い。総合的に見るとセシリ亞有利ということになるな」

ティエリアさんがディスプレイを見ながら説明してくれた。そしてそれを聞いて心配そうにディスプレイを見る篠さん。何か励ましの言葉を掛けるべきなのだが。生憎、そんな言葉は思いつかないので私も同じようにディスプレイを見つめる。

「最後のチャンスをあげますわ」

「チャンス? ん~、遠慮しとく」

そういうって、腰のGNブレイドを抜き、具合を確かめる。悪くは無い。けど、二刀流なんて初めてだから上手く使えるか不安だ。ふと、目の前にいる相手が震えていた。

「何処か具合が悪いのか?」

そういうと、相手はキッと俺を睨む。さてはやつきのチャンスを遠慮したのが不味かつたのか? そう考えると同時に試合開始の合図が鳴る。

「最後のチャンスを棒に振るつた事を後悔なさい。さあ、派手に踊りなさい!!! 私、セシリリア・オルコットとブルー・ティアーズが奏でる円^{ワルツ}奏曲で!!!」

言葉と共に手に持つたライフルからビームを連発する。

「へっ!!」

それをバックで移動しながら避ける。そして避けきれない物をGNブレイドで弾く。

「あ~、少しは出来るようですね? ではこれならどうかしら?」

そういうと、ブルー・ティアーズから四基。突起の様な物体が飛び出し、変則的に動きながらビームを撃つてくる。

「チイツ……！」

GZNブレイドを仕舞い、四基のビットから離れる。

「逃がしませんわ！……！」

追つてくるビット。ぶつつけでやってみるか。

「ぐうっ……！」

ビームを紙一重で避けながら一気に急制動を掛ける。幾ら、ISで守られているといつても限度があるらしい。それなりに辛い。そしてビットとの距離が一気に縮んだ瞬間、肩にあるGZNサーベルを抜く。

「ぐうっ……おおっ……！」

振り向きながら、加速。ビットの内、一基をすれ違い様に切り捨て、離れていくビット一基にエネルギーを抑えたGZNダガーを投げる。

「なつー？」

そして俺はそのままの速度を維持しながらブルー・ティアーズに急接近する。すると、驚きの表情をしていた相手が笑う。

「残念。まだありますのよ？」

そういうと、腰に設置されていた一基のビームから//サイルが飛んできた。

「つかつー？」

加速している俺にそれを避ける術は勿論無かつた。

ディスプレイでは急接近したお兄ちゃんを//サイルで撃墜したセシリアさんが戻っていた。

「あら～。今のは私でも避けられないな～」

「ヴァーチュの特性上、近接戦闘をする事は無いのだがな」

私の言葉を冷静にテイエリアさんが返す。ディスプレイを心配そうに見つめている篠さん。

「大丈夫だよ」

そういうって笑う。篠さんが私を見る。

「お兄ちゃんは」の程度でやられたりしないよ」

「…………やつだな」

そういうって、ディスプレイを見る。すると、変化があった。煙が晴れ白い機体が見えたからだ。

「まさか、一次移行!? 貴方、今まで初期設定で戦つてましたの?」

そんな声が聞こえていたが、俺は簡易ディスプレイに表示されたデータを見る。

『システム正常。零落白夜起動』

その文字が表示された瞬間、背中に設置されたGNドライブが唸りを上げGNソードの刀身が展開、エネルギーが噴出し、刃を作る。

「まあ、いいですわ。これで終わりです! ! !」

そういうと、俺に向かってミサイルを放つ。俺は右手にGNソードを持ち、左手に持ったGNロングブレイドでミサイルを切り裂く

「ならこれで! ! !」

ライフルを構え、ビームを放つ寸前、俺はGNロングブレイドを投げ、ライフルを破壊する。そしてそのまま、突っ込む。

「ぐつーっ。」

接近した俺に回避は無理だと分かったのか、右手に向かを持とうと、粒子を集めるが遅い。俺は振り上げた『雪崩式型』を振り下ろす。それはブルー・ティアーズを切り裂く。

『試合終了』。勝者、セシリ亞・オルゴット

寸前で『白武・七剣』のエネルギーが切れた。

試合が終わり、お兄ちゃんの部屋で反省会をすることになった。

「まあ、ドンマイだね~」

「やうだな。調子に乗つてエネルギー残量を確認していなかつたお前が悪い」

「返す言葉もありません」

そうこうして、深々とため息を吐くお兄ちゃん。

「まあ、最後の盛り返しが凄かつたよ。ね? 篠さん」

「むへ、ひ、ひむ。悪くは無かつたな」

やうこひと、俯いた顔を上げる。

「それにエネルギーが切れたから負けたんだよ？これって裏を返せば、エネルギーが後もう少しだけあれば勝つてたんだよ。代表候補生相手にコレは凄いと思つんだけぞ」

「やうだな。考えてみれば、最後はお前が押していたんだ。もつと修練を積めば、勝てるだろ？」

やうこひと、お兄けやんが顎に手を当けて考える。

「確かにやう、考えるとやうだよな。でも、負けは負けだしな～」

その言葉に私はため息を吐く。

「過ぎたことは後悔してもいいけど余計に引き摺らない！！！！じやないと次は本当に負けちやうよ？今日の失敗を明日の成功に繋げる。でしょ？」

やうこひと、笑う。

「…………だな。クヨクヨ悩み過ぐるのは駄目だよな」

やうこひと、朗らかに笑う。まあ、あんまり悩まないのも考え方だけぞ。

「えじや、私は部屋に戻るね」

「ああ、悪かつたな。約束破つて」

「んじゃ、次の約束はちゃんと守つてね？」

私の言葉にお兄ちゃんが頷く。

「ねつだ。十夏、お前ならセシリアにビリ勝つ？ 参考がてら聞きた
いんだが」

「う、お兄ちゃんが言ったので私も少し考える。

「そりだな～。私なら全兵装解放して飽和攻撃かな。私のヴァーチ
H、火力は既存の二倍ではダンントツで高いし」

まあ、奥の手を使えば問題は無いだろうけど。データ通りなら『
通常の二倍』の火力を引き出せるみたいだし。

「んじゃ、お休み」

ねつこつて、私は部屋を出る。じぱりと歩くと私の部屋の前で一
条さんと柿崎さんが並んで立っていた。

「お、来た来た」

柿崎さんはわざわざ笑つて笑つ。

「どうしたの？」

「いや、光がや。織斑に謝りたいんだつて」

やういって、一 条さんの背中を軽く叩く。一 条さんは少し恥ずかしそうに頬を搔きながら。

「 ！」の前は御免ね。言い過ぎた

「 ひつん。別に気にしないから大丈夫だよ」

そういうて、笑う。一 条さんも安心したのか笑みを作る。

「 もういえば、柿崎さんと一 条さん。仲が良さそうだったけど」

そういうて、柿崎さんは笑つて。

「 ああ、アタシ達幼馴染だからね。そりゃ、仲良いよ」

「 私たちの兄が昔からよく一緒に遊んでたから、それ経由で知り合つたの。それで色々あって今じゃ、親友かな」

そういうて、苦笑する一 条さん。苦労しているんだろうか。

「 ん？ もしかして織斑も仲間にに入る？」

「 いいの？」

少し驚きながら聞く。すると、柿崎さんは一 カツと笑つて。

「 いいも何も、考えてみたら私と織斑は友達だよ。それに光とも今日の模擬戦で友達になつたし！－！問題なし」

「 ？」

よく分からず首を傾げる。それを見て深々とため息を吐く一条さん。

「速華。それ、昔のしかも男限定のノリだから分からなって」

「へ？ そうなの？」

平原と聞き返す柿崎さんに一条さんは頭を押さえる。成る程『同じ釜の飯』とか『喧嘩した後は仲良くなる』とかそういう類のモノか。

「まあ、よく分らないけど。えっと友達になりませんか？」

「こんな聞き方は変だろ？ けど。仕方ない。そんな私の言葉が面白いのか一人は笑つて。

「だから、アタシと織斑はもう友達だって。まあ、今後とも宜しく！」

「そういえば、速華以外の友達は初めてかも。宜しくね」

私は一人と握手をかわす。すると、柿崎さんが思い出したように。

「そうだ。友達になつた記念にさ。お互に名前で呼ばない？ ほら、苗字だと間違えるでしょ？」

そう柿崎さんが言う。確かに苗字で呼ぶとお兄ちゃんかお姉ちゃんと間違えてしまう。しかし、まだ知り合つて間もないのに名前で呼ぶのは少し恥ずかしいな。でも、何事も挑戦かな。

「うん、よひしきね。速華さん、光さん」

「出来れば、さん付け無しがいいんだけどなー」

「無茶言わない。」れも個性だと思いたい。「これから」を宣しく十
夏」

「宣しく、十夏。よし、今日は友達記念として食堂でステーキだ!
!...」

そういうで、歩き出す速華さん。それを苦笑しながら光さんが続
く。

「アンタは単にステーキ食べたいだけでしょ? ほら、十夏も早く来
ないと今日の晩御飯がステーキとパインサラダ固定になるよ?」

「あ、うん」

流石にそれだけ固定というのは勘弁したい。そう思いながら一人
に急いで追いつく。色々ありましたが、学園生活は意外と楽しくな
りそうですよ? テイエリアさん。

第4話「射手と剣士」（後書き）

いつも、フィロです。今回は一夏対セシリ亞戦と十夏の友達作りです。ご意見、ご感想がありましたら送ってください。励みになりますので。では次回の更新をお楽しみに

第5話「新たな恋敵出現」

「食堂が騒がしいね」

「何でも一組がメインで騒いでるみたいだな」

「組、といひことはお兄ちゃんのクラスか。」

「ん？君はもしかして織斑十夏君？」

声に振り向くと、カメラを携えた女性徒が立っていた。

「ええ、やつですけど」

「ラッキー ちょっと一緒に来て。あ、そこの人達もついでに来て

「アタシ達はついでかよ」

と言いながらホイホイ付いてくる速華さんは正直どうかと思つ。光さんはため息を吐きながら付いてくる。食堂に入ると案の定、お兄ちゃんが女性徒に囲まれていた。そしてその両隣には篠さんと金髪の美少女が互いに牽制し合っていた。それを見て、何となく察した。

「あれ？十夏じゃないか、どうしたんだ？」

「通りかかったら、先輩に拉致られた」

そういって、お兄ちゃんに向かいに座る。

「へ～、十夏の兄貴つて案外、優男だな。兄貴とは大違いだ」

そういうて、笑いながら速華さんが隣に座る。

「そりや、速華のお兄さんに比べたら誰でも優男になるわよ。てい
うか、学生と軍人を同一視しない」

そういうて、光さんが座る。といふか、自然に私の隣に座つてい
る。私はお兄ちゃんを見ながら。

「両手に花。つてこいつ事を言つのかな?ん?」の場合は花束?」

「何言つてんだ?」

私の言葉に首を傾げながらお兄ちゃんが答える。私は深々とため
息を吐く。

「篠さん。大変でしょ?が、頑張つてください」

「な、何をだつ?ー」

「何つて?決まってるじゃないですか。それとも本人がいると恥ず
かしいんですね?」

そういうて、悪戯っぽく笑う。篠さんの顔が赤くなる。そして私
は金髪の人を見る。

「初めてまして。織斑十夏です」

「セシリ亞・オルゴットですか？」

口ひやかに挨拶を交わす。そして小声で呟く。

「正直、お兄ちゃんの何処が良いんですか？」

「ぶつ…? な、何を言つてますの? ! 私は別に一夏さんの事は」

「俺がどひつかした? 」

「何でもないよ~。とこりよつ、女の子の会話に入らうといしない。男子は部屋の隅にGO…!」

部屋の隅を指差す。

「こやこや、流石に今日の主役を隅に置くのは不味いって」

先輩がそういうと、お兄ちゃんに質問を始める。その間、私たちは運ばれてくる料理を楽しむことにした。そして一通り質問が終わると私に向く。

「さて、次は一夏君の妹さんに質問だ」

「私ですか? 」

そういって、私は先輩に向き直る。

「ズバリ! ! ! 妹から見て兄は? 」

「女垂らしです。そもそも誰かに刺されてもいい頃合なんぢゃない

かな～」

因みにお兄ちゃんは篠さんとセシリアさんと一緒に離れた場所で食事をしている。そして私の言葉に先輩の表情が固まる。

「あれ？ 私変な事言いました？」

「いや、結構辛口に言つたんだな～って。もう少し『お兄ちゃんは誰にも渡さない』とか言つたかと思つたけど」

「ブランはお姉ちゃんだけにしてください。」

「昔は確かにお兄ちゃんつ子でしたけど。中学生に入った時に色々ありました」

お兄ちゃんの部屋を掃除していくとベッドの下にアレな物があり、何と言つたか、中学の時期が物凄く接し辛かった。

「うそ、確かに兄さんの部屋は魔窟だよね」

「ホント、ホント。兄貴の部屋に入るのはここにんだけ。もう少し隠すモン隠せつてんだ」

私の言葉に光さんと速華さんがしきりに頷く。

「まあ、やじには深く聞かない」とことへ。で、次だけ貴女もクラス代表になつたんだよね？」

「え？ ああ、そうでしたね」

「もうでしたねって。まあ、いいや。それで、なにかコメントとか無い? 例えば『私が代表だ!!!!』とか」

何だろ? その例え。ふむ、コメントね~。

「特に無いですね~」

「了解、適当に捏造しておくから」

それ、コメント聞く必要ないじゃん。

「んじゃ、クラス代表のツーショット撮るかい」

そういって、私はお兄ちゃんの隣に座る。

「はあ~、なんでお兄ちゃんとツーショット撮りなきゃならないの?」

「俺に聞かれてもな~」

そういうて、苦笑するお兄ちゃん。面倒だから辞退しようかな~。そう、考えてみると視界の端にセシリアさんがいた。何処か悔しそうな表情だ。

「先輩、どうせならお兄ちゃんと戦ったセシリアさんと撮らせねば? ほり、一応お兄ちゃんって学園で貴重な男だし、セシリアさんは代表候補だし。兄妹で撮るよりもいいと思つただけど」

「む~。それもそうね。じゃあ、セシリアさん入れて三人で撮りましょ~」

そういうで、一ツコリ笑う。笑顔で「逃がさないよ?」と言つて
いるのが分かる。

「チイツ……！」

誰にも気付かれないよう舌打ちする。その後、三人で写真を撮
るもちよつとしたアクシデントがあった。まあ、問題は無さそうな
ので放置。後日、学校の掲示板に写真が貼り出されていた。

「やつちやつた……」

あの時、軽くイラついていたから、もしかしたらと思っていたの
だが、まさか本当にそうなつていたとは。写真に写っている私の瞳
が金色に変わっていた。

「あれ? 十夏の日、金色になつてねえか?」

速華さんが気付く。

「たぶん、ライトの反射じゃないの?」

「へ? あ、うん。そうだよね、絶対そうだよーーーーー!」

光さんの言葉に全力で賛同する私。同時に授業開始の鐘が鳴った。

「ほら、一人とも次の授業が始まるから行こ?」

「うん。ん?」

ふと、ポケットに入れてある携帯が震えた。見ると、メールが入っていた。

「差出人は？鈴ちゃん？」

そこにはお兄ちゃんのセカンド幼馴染である彼女の名前が表示されていた。何となく内容が理解できる。鈴ちゃんもお兄ちゃんが好きだから。様子が知りたいのだろう。

「後は学園での態度とか？」

そう思いながらメールを開く。やはり内容は最近のお兄ちゃんの様子を聞く感じ。しかも「丁寧に普通のメールの中にそれとなくお兄ちゃんの様子を尋ねる感じだ。それに苦笑しながらメールを見ている」と。

「へ？嘘？」

そこには自分も代表候補生としてEIS学園に転入する。という内容だった。

「うわ、マジ？」

「何がマジか分からんが。お前が授業に遅刻しているのはマジだ」

その言葉と共にスパンといつ音と共に出席簿が叩きつけられる。

第5話「新たな恋敵出現」（後書き）

短いです。次回は長くしたいなー。次回もお楽しみに

第6話「セカンド幼馴染」

「む～～～

携帯のアラームで目を覚ます。まだ眠りたい欲求を布団ごと蹴飛ばしてアラームを消す。上半身だけ起きて軽く身体を伸ばす。そして洗面所に行き、顔を洗つて目を覚ました後、歯を磨く。

「おはよ～

「ふおはあよ～」

ズルズルと足を引き摺りながら速華さんが起きてきた。朝が弱いらしい。最初は起こすのに苦労した。

「今日の一限つて何だっけ?」

顔を洗つてもまだ眠たそうな速華さんが聞いてくる。私は今日の時間割を思い出しながら。

「確か四組と合同でHSの機動訓練」

「おっし……頑張るか！……」

やつひつと、頬を叩いて目を覚ます速華さんに私は苦笑する。

「相変わらず、座学より訓練が好きだね」

「体、動かせるからな」

そういうで、一ヶと笑う。身体は女らしいのこいつの仕草が男らしいな。

「なら、早めに朝御飯食べようか」

「だな」

お互に笑う。その後、制服に着替え、簡単な朝食を取った後、寮の出入り口で光さんと会流してから学校に向かった。

「そりや、一組に専用機持ちの転校生が来たっけ」

「ああ、確か中国代表だっけ?」

一人の話を聞きながらふと、一組の教室に目を向けて驚く。

「あん? 誰だ、あのチビッ子」

速華さんがその子に気付く。私は軽くため息を吐いて。格好付けの幼馴染に近づく。

「鈴ちゃん?」

「なによ?」

不機嫌そうに振り向く鈴ちゃんの頭に手刀を叩き込む。

「な、何すんのよ、十夏!—!—!—!」

顔を真っ赤にして叫ぶ鈴ちゃん。うん、何時も通り。

「駄目だよー。お兄ちゃん、変に気取った姿見せても普通に対応するから恥搔くだけだつて」

やついつて、微笑む。

「久しぶりに会ったんだから。少しは変わったところ見せたいのは分かるけど。お兄ちゃんの場合、普段通りに見せれば問題ないから」

「そりゃ、そりだけべ」

腕を組んで不貞腐れる鈴ちゃん。

「ああ、やつぱり鈴か」

やつこって、嬉しそうに笑つお兄ちゃん。うん、少し周り見たほうがいいこと思つよ? もう、笄さんとセシリアさんの視線が鋭くなつてるし。

「ほら、鈴ちゃん。皿口詰六」

「なんで、私がそんなことしなくちゃいけないのよ?」

分かつてないなー。それとも、久しぶりにお兄ちゃんに会えたから舞い上がってる? 私は小声で。

「ほら、お兄ちゃんを狙つている子達に自分の有利性を見せ付けなれや」

「やつことと、鈴ちゃんが気付く。

「やうね。やつことアピールも必要よね」

やうこつて、鈴ちゃんが一步前に出る。私は教室から出る。

「初めまして。私は一夏の幼馴染でえつ？！」

鈴ちゃんの言葉が上からの衝撃で途切れる。鈴ちゃんの後ろには無表情のお姉ちゃんが立っていた。

「わ～て、私もクラスに戻らなくちゃ

「ひつでえ～」

「いい性格してるわね」

私の言葉に一人は苦笑する。その後、放課になるとお兄ちゃんからメールが来た。

「面倒だな～」

と言いつつ、私は指定された場所へ向かう。そこはHSの訓練場だった。中に入るとなお兄ちゃんの他に篠さんとセシリアさんがいた。

「おお～、来た来た

お兄ちゃんが嬉しそうに手を振っている。

「やうしたの？HSのマークなら間に合ひやうだね～」

そういうで、二人を見ると一人がコク「クと頷く。

「ううん、一人の説明だとよく分からなくてさ。お前からも教えて欲しいんだ」

「うわあ、コーチが一人もいて。その言い草は無いと思つな~」

まあ、それでも取り敢えずは聞いておこう。何やらヒヒでの『急加速・急制動』が難しいらしい。取り敢えず、二人がお兄ちゃんに教えたアドバイスを教えてもらつた。

「はあ~」

そして深くため息。篠さん、幾らなんでもその教え方は感覚的過ぎるよ。

「え~っと、先ずは大前提ね。お兄ちゃん、適度に頭悪いから。そういう感覚的な説明とか理論的な説明は理解できないんだよ

「そうなのか?」

「では、どんな教え方がいいんですの?」

セシリ亞さんの言葉に少し考えてから。お兄ちゃんを見る。

「お兄ちゃん。弾丸とやつたチキンレース覚えてる?」

「ん? ああ、覚えてるぜ」

それなら話が早い。

「それと同じ要領だよ。あの時と同じ感覚でやれば問題ないよ」

そういうて、笑う。実際、私も速華さんとチキンレース感覚で『急加速・急制動』覚えたし。そう考えているとお兄ちゃんが早速練習してくる。

「「むー」」

一人が唸る。丁度、お兄ちゃんが地上、15cm位で止まったようだ。むー、私は20cmだったのに。

「それにしても、十夏さんは教え方が上手いですね」

何処か悔しそうに話すセシリアちゃん。

「まあ、伊達に兄妹じゃないからね。お兄ちゃんに関しては何でも知ってるよーーーお兄ちゃんの好みのタイプとかベッドの下にあるアレな本のジャンルとか」

言つて、その中に姉物しか無かつたのを思い出し、軽くお兄ちゃんに殺意が沸く。何んだけお姉ちゃんが好きなのよ。

「好みの」

「タイプですか?」

そつちこ食いつくか。まあ、当たり前だよね。

「因みに情報料が必要だからね?」

「「く?」」

一人が驚く。

「だつて、家族のプライベートだよ?そしてそれを教えた人がもしかしたら私の義姉になるかもしれないんだし。情報料位取つてもいいでしょ?それに今ならお兄ちゃんの写真付き」

そういうて、財布からお兄ちゃんの写真をチラチラ見せる。それに生睡を飲み込む二人。すると篠さんはハツとなり。

「わ、私は聞かんぞ?第一、アイツの好みなぞ興味ないからな!!」

「そ、そうですわ!!!!私は一夏さんの事なんかこれっぽっちも興味ありません!!!!」

そういうて、腕を組む二人。顔が赤い。むむ?中々強敵だな。蘭ちゃんとは大違いだ。

「助かったよ、十夏」

そういうて、近づくお兄ちゃん。汗臭い。

「役に立てて良かった。流石に模擬戦は無理だけどこれくらいの事なら協力できるよ」

「ん?なんで模擬戦駄目なんだ?」

まつたく、この兄貴は。

「あのね。私とお兄ちゃんはお互にクラス代表同士。今度、クラス対抗があるんだよ? なんで、手の内見せ合ひのような事するのよ?」

「あ、そつか」

ポン、と手を叩く。その反応に私たち三人がため息を吐く。すると、計ったかのように鈴ちゃんがスポーツタオルとスポーツドリンクを持ってきた。

「あ、十夏! 朝はよくもやつてくれたわね~! ! ! !

「え~、代表の癖にお姉ちゃんの気配に気付かなかつた鈴ちゃんが悪いんじゃない? それとも久しぶりにお兄ちゃんに会えて嬉しかつたから分からなかつた?」

「んなつ? そなんじやないわよ! ! ! !

顔を真つ赤にしてそんなこと言つても説得力無いな~。といつより、この三人、もう少し素直になれないんだろうか。

「それじゃ、私は部屋に戻るから」

「ん? もう行くのか?」

お兄ちゃんが聞いてくる。さつきの話を聞いていたのだろうか。

「言つたでしょ? 私とお姉ちゃん。それと鈴ちゃんは敵同士になる

んだから。それなりに対策とかE.Sの整備とかしなくちゃいけないの。それにお邪魔虫は早々に退散したほうがいいでしょ？」

最後の言葉に三人が顔を赤くする。お兄ちゃんは首を傾げる。「うむ、そろそろお兄ちゃんの本念仁をどうにかしないと皆が可哀想だ。そう思いながら、外に出て、この後どうじょうか商談んでいると、篠さんが出てくる。

「十夏」

「何でじゅうわ？」

「二人部屋とはいこるものだな！……！」

「はい？」

そのまま、篠さんは歩いていく。何を言いたいのか今一つ分からぬのだが。

「おや？トオカじやないか。どうかしたのか？」

「ティエリ亞さん？」

すると、ティエリ亞さんがやつてきた。『白式・七剣』の製作者、という立場上E.S学園で仕事をしているのだ。内容は主にE.Sの整備関係の手伝い、といふらしい。

「いや、お兄ちゃんに呼ばれたんです」

「ふむ、その様子だともう、用事は終わったようだな。彼は中にい

るのかな？」

「こまかに、今は中に入らないうが」と思こまく」

そういって、中を指で示す。そこにまなにやら口論している玲ちゃんとも兄ちゃん。それを遠巻きに見るしか出来ない、セシリ亞さんだつた。

「やのよつだ。なら、もつ少し時間を潰していくとしよう」

「あ、ティエリヤさん。もし良かつたら一緒に夕飯どうですか？」

「こや、また今度にするよ。それじゃ」

そういって、歩いてこへティエリヤさん。失敗か。

「残念。でも次こそは誘つてやる……」

拳を強く握る。そうと決まれば、早速料理の練習。丁度私の部屋には大食らいがるので作りすぎには困らないのだ。

「彼女にせむることをしたな」

そういって、デスクに座りயを起動する。

「それに彼にも言いそびれたが、まあ伝える機会はまだある。急ぐことはないな」

そんな事を考えていると携帯が鳴る。見ると非通知の文字が浮かんでいる。

「また彼女か」

ため息を吐きながら、通話ボタンを押す。

張り切つて作ったはいいけど、調子に乗りすぎた。私はテーブルに並んだ料理を見て苦笑する。

「これは流石に作り過ぎだよね」

「そうだな。流石に私でも食べ切れないわ」

速華さんも苦笑している。ふむ、それなら。

「お裾分けかな」

取り敢えず、日持ちする奴をタッパーに詰める。

「光さん」テイヒリアさん……は部屋分かんないから無し。お兄ちゃんか

そういうて、外に出る。因みに光さんの所には速華さんに行つて貰つた。

「あ～、もしかして皆、夕飯食べ終わつてるかも」

そんな事を考えながら歩いていくと。

「最つつづ低……………女の子との約束を覚えてないなんて、男の風上にも置けないヤツ…………犬に噉まれて死ね…………」

そんな怒声が聞こえたと思つたら凄い速さで鈴ちゃんが私の横を通り過ぎた。嫌な予感を覚えつつもお兄ちゃんの部屋に向かうと、赤くなつた頬を摩つているお兄ちゃんと不機嫌そうな篠さん。それを見て何があつたか何となく分かつた。

「お兄ちゃん。追わないの？」

「やつぱ追つた方がいいのか？」

呆れた。私は手に持つていたタッパーを放り投げる。それを危なげなく受け取るお兄ちゃん。

「鈴ちゃんは私が追うから。お兄ちゃんは鈴ちゃんに対するじうすればいいか、考えること。いい？」

もうじつて、走り出す。さて、何処にいるかな？

「見つけた」

あれから十分くらい探ししてると寮の入り口にある花壇に鈴ちゃんが腰を下りていた。

「鈴ちゃん」

「…………十夏」

顔を上げた鈴ちゃん。見ると泣いていたのか、少しだけ目元が赤い。私は息を整えて隣に座る。

「何か用？」

「もう、そんな邪魔にしないでよ。お兄ちゃんがなかつたのは悪かったけど」

やつこいつと鈴ちゃんが赤くなる。やつぱつお兄ちゃんが追つて来てくれると思ったらじー。

「ねえ、一夏ひしわ。女心分かってないよね？」

「そんなの、今に始まつた」とじやないよ」

そういうて、笑うと鈴ちゃんも少しだけ笑う。そして鈴ちゃんが先ほどの原因を話し始める。

「うわ、それ絶対お兄ちゃんが悪いじゃん」

「やつよ。」のアタシとの約束を勘違いするなんて

「まあ、正直に言わなかつた鈴ちゃんも悪いけどね」

「うぐ……」

鈴ちゃんのリアクションにクスクスと笑う。それから鈴ちゃんがお兄ちゃんに対する愚痴を言い始める。それに私が相槌したりする。

「何よ、十夏。なんか可笑しい？」

自然と笑つていたらしく。

「なんか不思議だなつて。前はさ、私が愚痴とか言つ方だつたからそ。覚えてる？」

「まあね。殆ど一夏に対する不満だつたわね。後、たまに千冬さんだつけ？でも大袈裟じゃない？愚痴聞くだけなんて」

「でも、今まで私の愚痴聞いてくれる人なんていなかつたから、凄く嬉しかつたんだよ？」

「や、やつ？」

申し訳無セそうにしている鈴ちゃん。今なら分かる。私の愚痴を

聞いてくれた時、鈴ちゃんは私の為に聞いてくれたんじゃない。あの時、どうやってお兄ちゃんの気を惹こうかと思って丁度私がいたから利用したのだ。でも、嘘だったとしても、自分を織斑一夏の弟でも織斑千冬の妹としてではなく、織斑十夏として見てくれた最初の友達なのだ。

「だからせ、ずっと恩返しがしたかったんだ」

「私の愚痴を聞くのが恩返し?」

鈴ちゃんの言葉に頷く。

「うん、残念だけどそれだけ。あの時、言ったよね?私は中立の立場だつて」

「やうね

鈴ちゃんが頷く。

「ねえ、十夏」

「なに?」

「一夏つて好きな人いるの?」

鈴ちゃんの言葉に少し考える。

「そうだね~。お兄ちゃんの事を好きな人はいるけど。本人は今所いないと思つよ」

「そつか。因みにライバル。どれくらい増えた?」

「一人かな。鈴ちゃんの前にいた雛さんは前に話したから知ってるでしょ? 後はセシリアさんだね」

そういうと、鈴ちゃんが少しだけ唸る。多分、怒りの矛先はお兄ちゃんだろう。あの人のべつ幕なしに女の子を惚れさせるから。困った人だよね。

「それでお兄ちゃんとはどうするの?..」

「当然。アイツが謝るまで許してやるモンですか!!--!..」

グッと拳を握つて宣誓する鈴ちゃん。

「じゃあ、お兄ちゃんが話しかけてきた時は無視しない様にしなくちゃね」

「うん。けど、やっぱり怒った手前、素直に話を聞くのも何か変じゃない?」

鈴ちゃんが頬を搔ぐ。

「じゃあ、怒ったフリしながら聞いてあげれば? お兄ちゃん、そこの超鈍いから。見た感じ『私不機嫌ですよ~』って見せれば問題ないと思つ」

そういうと、頬を膨らまして腰に腕を当つて、怒ったフリをする。それを見て鈴ちゃんが噴出す。同時に鈴ちゃんのお腹が鳴つた。

「良かつたら一緒に夕飯食べる?」

「うん」

その後、部屋に戻るとテーブルに突っ伏している速華さんを見付けた。どうやら律儀に待ってくれていたらしい。

「さて、鈴ちゃんが謝るまで許さないって発言をしてから結構経つたね~」

「そうね」

鈴ちゃんが申し訳無むなしじてている。

「なんで一人の仲が改善されてないの?」

「それは、その。一夏が悪いのよ!……よつにもよつて私の事をひ……貧乳ですって。確かに私は十夏よりも胸とか身長とか小さいわよ。悪かったわね!……!」

「なんで、そこで私に当たるかな。ていうか、少し怒ったフリして、お兄ちゃんに謝罪させるんじゃなかつたの?それがなんで、あんな口喧嘩に発展したのか、詳しく聞きたいんだけど?」

私が詰め寄ると、鈴ちゃんは視線をすり。 「それは～、その～。やっぱつ面と向かこ會ひ」と

「恥ずかしい？」

聞くと、鈴ちゃんが頷く。私はため息を吐く。

「どうすんの？」のままだと他の一人にリードされたり、別の子が現れるよ？それに蘭ちゃんだって来年には入学するつもりだね」 「うう

「う～」

頭を抱え、唸り始める。まあ、いつなつてしまつてしまふようもない。

「とにかく今はクラス対抗に専念したほうがいいのかな？お兄ちゃんの事はクラス対抗が終わってから考えよう」

「…………うん。 そうね、今は田の前の」と集中しなへりや。十夏、言つとくナビ手加減なんかしないからね？」

「ハハこう切り替えるの速さは感心するな～。

「勿論、手加減なんでしたら怒るからね」

そういうて、笑う。 ハハやり鈴ちゃんにとって一回戦のお兄ちゃんは敵ではないしね。

「完成～～～」

そういって私は回転する椅子の上で喜ぶ。

『カンセイー！カンセイー！』

すぐ隣では私の言葉を真似する黄色いボール。ティエリ～から借りた『ハロ』がピカピカと目を光らせる。私はハロを抱きしめて。

「ふつふつふ～。ティエリ～の驚く顔が田に浮かぶね～。楽しみだな～、早くいっくんの試合に出田にならないかな～」

そういって私は今完成したモノを見る。一対の目が赤く輝く自信作を。

「前に作った子もいけど、『君達』もどんな活躍を見せてくれるのか。楽しみだな～」

『タノシミダ～！タノシミダ～！』

その日の私はずっと上機嫌でした、まる。

第6話「セカンド幼馴染」（後書き）

いつも、作者です。今回は鈴登場からクラス対抗前までです。そして何か企んでいる東博士。さて、彼女は何を作ったんでしょう？まあ、勘の鋭い人は分かると思いますが。書いてみて意外と長いですが、皆さん。大丈夫でしょうか？もう少し短くしたほうがいいのかな？次回をお楽しみに

第7話「決戦・前編」

「わーわー、始まつちやつね~」

「十夏さん。何だか楽しそうですね」

「そりゃそりゃ。だつて一組と二組の対戦が先に見れるんだよ？勝った方の戦い方も分かるし、それによつて対抗策も考えられるんだもん。楽しいわけないよ」

まあ、それだけじゃないんだけどね。

「十夏は一夏の応援をするのか？」

隣にいる篠さんが話しかけてきた。因みに私の両隣にセシリアさんと篠さんが座つてゐるのだ。本当は速華さんや光さんと一緒に見たかったのだが、二人に声を掛ける前に篠さんに連行されたのだ。

「どうしようかな~。幼馴染との約束を履き違えた馬鹿兄貴を応援したほうがいいのかな？」

「それを聞かれると返答しづらい~

「どうやら篠さんも想ひとおりがあるようだ。

「かといって、中学で出来た初めての友達を応援しないのも悪いじゃない？まあ、本当の所。お兄ちゃんより鈴ちゃんを応援するつもりなんだけどね。だつて、お兄ちゃんを応援する人、一人も確定してるんだもん。今まで加わつたら鈴ちゃんが可哀想だからね」

笑つて言つと、両隣の二人が顔を赤くする。そこでふと気がつく。
そういうえば、お兄ちゃんを応援するのは後一人いたつけ。

「試合開始まで五分を切つたが、どう思つテイエリア？」

視線だけはアリーナに向けながら、彼女は僕に問う。僕は腕を組みながら。

「そうだな。僕としてはこの試合はとても興味深い。未だ『白式・七剣』はその総てを曝け出していない。そして操縦者でもある彼もまだ素人同然だ。そして相手はデータなどを見る限り、最初の相手であるセシリ亞とは違う戦い方をするようだ。これは彼にとつてもISにとってもいい経験になるだろ？」

彼女が作り出したISは自己進化する機械。まったくとんでもないモノを作りだした物だ。そしてその動機が『興味』という唯一言なのだ。まあ、その動機に僕とチフュが関わっているのは否定できないが。

「確かに一夏にとつてこの戦闘はいい経験になるだろう。だが、私が聞いているのは一夏の事ではない」

その言葉にチフュの隣で椅子に座っているマヤが首を傾げる。僕

は浅くため息を吐くと。

「乱入の可能性は高いだろ？　祭りや大騒ぎが好きな彼女の事だ。前回は様子見、もしくは突発過ぎて彼女の想定外だつただろうが、今回は定期的なイベントだ。彼女も何かしらのアクションを取つてくれるだろ？　問題は」

「どんな手段で乱入してくる、か」

さう呟くと同時に試合開始の令囃が鳴った。

咄嗟に動かしたGNソードに重い衝撃が走る。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない」

そう言いながら、両端に刃の付いた青竜刀をバトンのように回転させながら攻撃してくる。流石にGNソードだけでは受けきれない。悟り、左手にGNブレイドを持つて鈴の猛攻を防ぐ。

「中々やるじゃない。でも」

ばかっと鈴の肩アーマーがスライドして開く。中心の球体が光り、俺は目に見えない衝撃に『殴り』とぼされた。

「なるつ……」

吹き飛びながらGNソードとGNブレイドから手を離し、腰のGNビームダガーを鈴に投げつける。そして地面に激突する直前、急制動を掛けながら、放り投げた二刀を拾う。

「へえ、まぐれにしてはやるじやないの」

鈴の声に空を仰ぐと、先ほど開いた肩アーマーの片方にダガーが刺さっていた。もう片方は弾かれたのか地面に落ちている。

「けど、砲身はまだあるのよ。覚悟は出来る。」

そうこうと、むづむづの方のアーマーから衝撃が飛んできた。

「最初はヒヤッとしたけど、なんだ衝撃かい？」

けど、少し安心した。アレならフィールドを抜けられる心配はない。

「確かに十夏さんのヴァーチュならあれくらいには痛くも無からずですけど」

「まあ、お兄ちやんにまきついかもね」

そういうで、会場を見る。そこでは鈴つかやんの衝撃砲に翻弄されるお兄ちやんがいた。

「ううん。あの衝撃砲。威力はともかく、次弾のタイムラグが殆ど無いのは厄介だな~」

しかも、意図的に感覚をズラしている時もあるようだ。これじゃ、少し辛いかもしない。もし、鈴ちやんと戦つときはあの衝撃砲に対応するのが最優先ということになる。私のヴァーチュにはISO自体に対して最強の切り札を持っている。けど、それは『最悪の事態』になつた場合のみ。

「なんか、ワクワクするな~」

そう言って私は会場を見る。

さて、じつするか。

「よく避けるじゃない。けど、避けてばかりじゃ勝てないわよ~」

確かにその通りだ。けど、未だ俺の頭には打開策が浮かばない。

「お~と」

ブレーキを掛けながら方向転換する。取り敢えず、考えても仕方が無い。

「そんじゃ、反撃と行きますかね」

そういうて、俺は鈴に向かってGNブレイドを一本投げる。即座に衝撃砲『龍砲』でGNブレイドを弾き落とす。少し近づいた。けど、まだ遠い。

「もう一丁！……！」

肩のビームソードを調整してダガーに切り替え、投げつける。

「アンタ、何本持つてんのよ！……！」

怒声と共に『龍砲』で迎撃する。この距離ならいける。

「それは内緒だ！……！」

叫びと共に『イグニッショナリスト瞬時加速』で近づく。

「そんなの丸分かりよ！……！」

それに対応してくる鈴。互いの刃がぶつかる寸前、アリーナに大きな衝撃が響いた。

「何！？」

見るとステージ中央から煙が立っている。どうやら『何か』がア

リーナの遮断シールドを突破したようだ。すると、鈴から通信が入った。

『一夏、試合は中止よ。直ぐヒピットに戻つて……』

鈴の声が聞こえた瞬間、ハイパーセンサーが緊急通告を行つてきつた。

『ステージ上空に熱源。所属不明のI.Sと断定。ロックされています』

「嘘だろ！？」

叫びながら、移動する。同時に上空から青い弾が降り注ぐ。

「鈴大丈夫か？」

『私より自分の心配しなさいよ。こつちは大丈夫。けど、なにあのI.S』

鈴の言葉と共に攻撃が止む。俺も鈴に倣つて上を見上げる。

「なん……だ……アレ？」

そこには人型の上半身に巨大な箱型の下半身が合体した異形が静かに佇んでいた。

第7話「決戦・前編」（後書き）

いつもフイロです。今回は乱入者の登場までです。次回も戦闘です。
次回は少々派手に行きたいと思うので、期待ください。

いきなりの侵入者は俺に狙いを定めたのか、手に持っているライフルを撃つてくる。

「？」

それを避け、避けきれないものを持つていてるGNソードで弾きながら距離を取る。すると、下半身の前部が展開し、光が収束する。

「マジかよー。?」

直ぐに『瞬時加速』で射線から離れる。瞬間、収束した光がさつきまで俺がいた場所に放たれ、爆発する。

「あんなの、喰らつたら。骨も残らなさそうだ」

何せ、遮断シールドをも貫通する代物だ。ISのシールドも同様に貫通できるだろう。そう、考えていると敵ISが一瞬、揺れる。

「鈴？」

見ると、鈴が『龍砲』で侵入者を攻撃していた。そして通信が入

る。

一夏、今のうちにピットに戻つて。此処は私が食い止める……。』

「馬鹿言うな！！！さつきの砲撃見たら！！！あんなの喰らつたら
一たまりも無いぞ！！！それにお前の衝撃砲だつて片方しかない

んだぞ！？

『じゃあ、何か打開策があるの？遠距離兵装を持つてない一夏に何が出来るの？』

「動き回って囮になる。その間にお前はペリットに戻れ」

『馬鹿！！！！！格好付けんじゃないわよ！！！アンタ、私との戦いでどれだけシールドエネルギー減つたか分かつてんのーーー』

鈴の怒声が響く。同時に侵入者が鈴に向きを変える。

「鈴！！！」

即座に移動する。同時に侵入者が迎撃してくるがそれを避ける。

「馬鹿！……」うち来てどうすんのよ……。

怒鳴られるが、無視して鈴を突き飛ばす。同時に何か重い物がぶつかる衝撃。

「ぐう？」

「一夏？！」

鈴の叫びを聞きながら、GNソードを振るも、直前で後ろに後退したのか、装甲を浅く傷つける事しか出来なかつた。

「ウニ」

そして上半身の腕がGN-ソードを掴み、俺」と地面に投げつける。地面との衝突はギリギリで回避出来た。そして箱型の下半身から蜘蛛の様な足が左右に三本ずつ、計六本飛び出して、楔の様に地面に刺さる。そして展開した前部がスパークしたと感じた瞬間、全身に痛みが走った。

夏！！！！

叫びと共に『龍砲』を撃ちながら、接近する。足場を固定しているせいか、ISは小揺るぎもしない。それに歯噛みしながらも手に持った青竜刀で斬り付ける。

——夏から離れるオオオオオオッ！――――――

叫び、何度も斬り付ける。するとHISは器用にジャンプして離れ
た。

「一夏…………」

直ぐに一夏を見る。どうやら意識はあるようだ。

「大丈夫!? 一夏…………」

「ぐつ」

プスプスとIISから煙が出ているものの、一夏の身体には（見える部分だけだが）何処も異常は無む事つだ。

「ああ、くそ…………瞬、綺麗な河とお花畠が見えた」

「次見えても、絶対に渡つたら駄目だからね?」

良かつた、大丈夫みたい。

「無事なら、さつさとピットに戻りなさい。さつきの攻撃でシールドエネルギーも無くなつたでしょ?」

「いや、可笑しな事にさ。体当たりのダメージはあるんだけど、電撃のダメージはまったく無いんだよ」

「はあ?じゃあ、何?さつきの電撃はシールドエネルギー貫通してパイロットに直接ダメージ』『えてるの?」

私の言葉に一夏が頷く。

「だったら尙更、アンタはピットに戻りなさいよ」

「お前、さつきの見てたろ！？もし、俺がいなくなつて電撃喰らつたら、誰が助けてくれるんだよ！？」

そんな口論を続けながら、疑問に思つ。何故、相手はこんな好機に攻撃をしてこないのでだろうか。

「ねえ、変じやない？」

「え？ 確かに変だな。なんでアイツ、攻撃して来ねえんだ？」

私達の視線の先には静かに佇んでいる謎のE.S.。まるで私達の行動を観察しているみたいな。そう思つていると、下半身がスパークし始める。

「また来るわよ！－！」

『織斑くん！鳳さん！今すぐアリーナから脱出してください－－－！』

「分かつてますけど、相手が私たちに狙いを定めている状態でどうやって脱出しようとー？」

敵の攻撃を避けながら、アナウンスをしている先生に反論する。

「まったく、彼女の行動には驚かされるばかりだ

「ティエリアさん…！そんな呑気に構えている場合ですか…？」

あまりにも呑気なティエリアさんの口調に思わず食つて掛かる。

「だが、慌てて事態が解決する訳ではないだろう？今、僕たちに必要なのは冷静に対処することだ」

「ティエリアの言つ通りだ

そういって、千冬先生は「コーヒーを淹れてい

「今は「コーヒーでも飲んで落ち着け」じゃないか

やういって、千冬先生が微笑む。

「チフコ。それは塩だ

「…………」

ティエリアさんの指摘通り、千冬先生が持っていたのは塩だった。しかもでかでかと塩と書かれていた。

「なぜ塩があるんだ？」

「さ、さあ。あつ…–せっぱり弟さんが心配なんですね！…だからそんなミスを

「

言つて氣付く。ティエリアさん、なんでそんな哀れんだ視線で見

てこゆのやしじゅうか？

「三田村」

「は、はーーー。」

「の日から私は千冬先生に家族関連で話を振る事を止めました。

「お兄ちゃん、聞こえるーーー。」

私はペーパートでお兄ちゃんに通信を送る。だが、帰つてくるのはノイズばかり。

「リリまで近づいても黙つか」

「へーーー田の前に一夏がいるのに何も出来なことは

「歯痒いですわーー！」

隣にいる篠さんとセシコアさんが呻く。

「せめて、通信できれば」

もう思つてこると、後ろで何かが動く音がした。

「何？」

後ろを振り向くと、そこにはバスケットボール位の大きさでオレンジ色の。

「ハロ?」

私の言葉に反応したのか、ハロは（原理は不明だが）元気よく跳ねる。

『トオカ！－トオカ！－』

ふと、私はハロの口部分に小型端末が挟まっているのに気がつく。

「これって」

『ツカエ！－ツカエ！－』

ハロの言葉と共に端末をハロに繋げ、ハロの口からコードを伸ばし、壁に付いている端末に繋げる。

「お願い、間に合つて……！－！」

「くっそ……」

悪態を吐きながら、体当たりを避ける。同時に地面に落ちていたり、刺さっている剣を拾い、武装ラッチに収める。

「さつきから体当たりばつか。もしかしてエネルギー切れかしら?」

鈴の言葉通り、確かにさつきから攻撃は体当たりや、足を展開しての格闘攻撃。それもかなりお粗末だ。

「にしても、さつきから一言も話さないな。本当に人が乗つてんのか?」

「なに、馬鹿な事言つてんのよ。ISは人が乗らないと動かないのよ?」

確かにその通りなのだが、何と言つか、動きに『人間味』というのが欠けているような気がする。

『…………ちゃん!…………える!…』

そんな時、ノイズしか聞こえなかつた通信に聞きなれた声がした。

「十夏なのか?」

『よかつた。今度は通じたみたい』

通信の向こうで十夏が安心したように息を吐く。

「お前、避難してなかつたのか?」

『そんな事はどうでもいいの……時間が無いから手短に説明するわよ。』

俺の意見を聞かず、十夏が喋る。

『私とお兄ちゃんのHSに組み込まれている特殊システム『TRA NS-AM』について説明するよ?』

「トランザム?」

『『』のシステムはGNDドライブ内部にある高濃度圧縮粒子を全面開放することで、一定時間機体スペックを三倍にする事が出来るシステムなの』

「三倍?…本当か?」

『話は最後まで聞く!!!!いい?』のシステムにはデメリットが二つあるの。一つは制限時間。もう一つは通常状態に戻ったときに大幅なスペックダウンを引き起こすの。言っている意味、分かるよね?』

「つまり、システムを作動したらやつたと敵を倒せって事か?」

『そういう事、分かつたら。今から指示する通りにプログラム打ち込んで。システムの解除コードを語りわわ』

「お、おわ」

言われた通りにプログラムを打ち込むと浮かんでいたディスプレ

イが赤く染まり『TRANS-AM』と文字が出た。

『出できたね？これで何時でもシステムを作動できるよ。作動の仕方は音声入力でシステムの名前を言つか、さつきやつたプログラムを打つだけ。分かった？』

「サンキュー、十夏。行くぜ……トランザム……」

叫びと共に背中のGNドライブが唸り『白式・七剣』の装甲が赤く輝く。同時にディスプレイにはシステム残り時間が現れる。

「げつ！？一分しか無いのかよ」

本当に短期決戦用なんだな。つと、驚いてる場合じゃないな。

「鈴、後は任せろーーー！」

「はあつ！？アンタ、何言つて

鈴の言葉を背中に聞きながら、俺は空を駆ける。同時に両肩にセットされているペームソードを抜く。

「あれが十夏の言つていたGNドライブの能力」

「けれど、一夏さんのISには既に能力があつた筈でしたが」

「うん、お兄ちゃんのIS『白式・七剣』自体の能力はGNソードを展開して現れる『バリア無効化攻撃』あの『TRANS-AM』システムはGNドライヴの固有能力だよ」

そつ、私のヴァーチュにもISとしての固有能力がある。滅多に使おうとは思わないが。

「取り敢えず、二人とも私の後ろに下がって」

「何をするつもりだ？」

篠さんの言葉に私は笑つて。

「邪魔だからその遮断フィールド吹き飛ばすの」

そういうて、私はヴァーチュを起動する。

『フキトバスゼ！－！－！フキトバスゼ』

ハロの応援（？）を背中に受け、私はGNバズーカを腹部に接続する。GNバズーカが展開する。

「本当に大丈夫なのか？」

篠さんの言葉に私は苦笑する。

「大丈夫だよ。ヴァーチュの火力を甘く見ないでね。それと、セシリ亞さん。今のうちにISを展開しておいて、フィールドを突破し

た後、直ぐにアリーナに入れると、

「分かりましたわ」

そういうと、セシリシアさんがエスを起動する。

「GNバズーカ。バーストモード、発射」

言葉と共にトリガーを引く。

「ハアアアアアツ！――！」

弾丸を避けながら、俺は敵ISに接近する。同時に敵ISが足を展開して、対応してくるが。

「遅いぜ！――！」

右手のGNビームソードで足を一本切断し、下半身に突き刺す。そしてそのまま、流れるように反対側の足を左手のビームソードで一本切り、同じように突き刺す。

「まだまだアツ！――！」

叫びと共に腰の武装ラッシュからGNブレイドを一本抜き放つ。同

時にI Sが突進してくるが、それを時計回りに回って避け、すれ違
い様、足を一本切断、ブレイドを一本突き刺す。片側の足を総て切
られた敵はバランスを崩す。そこにすかさずGNダガーを投げる。
一本の内、一本が展開した前部に刺さり、小さな爆発を起こす。

「これで……！」

右手に構えたGNソード『雪片式型』を構え『イグニッシュゲアメイト瞬時加速』で近づ
きながら、残りの足も切り捨てる。

「終わりだアアツ…………！」

そしてエネルギー刃を展開した『雪片式型』で切り裂く。そして
同時にトランザムシステムが切れ『白式・七剣』は元の白い装甲に
戻る。数瞬の間を置いて、敵I Sの下半身が爆発する。そして上半
身は下半身から飛び出した。やはり思った通り、下半身と上半身は
別々の様だ。そう思つてみると、ピットで轟音が聞こえた。

「今度は何だ？」

見ると、ピットがある場所から煙が立ち込めている。そしてそこ
からブルー・ティアーズを展開したセシリニアとヴァーチェを展開し
た十夏が出てきた。

「つーつーお兄ちゃん、下がつて…………！」

十夏の切羽詰つた声に従い、後ろに下がる。同時に俺がいた場所
に赤い閃光が幾つも突き刺さり、煙を上げる。見上げると、そこには同じ形状の『フル全身装甲スキン』製I Sが浮かんでいた。

「次から次へと、今度は何だよーーーー！」

思わず叫んでもしまう。そいつ等は鈍く輝く銀色のボディに無機質な一対の赤い瞳を灯らせながら、俺たちを静かに見つめていた。

第8話「決戦・中編」（後書き）

いつも、作者です。今回は『アグリッサをトランザムでダルマにする』の巻でした。そして乱入してきた謎のIS!!まあ、分かりますよね。次回もお楽しみに。修正しました

第9話「決戦・後編」

空に浮かぶ四つのエリは最初にやつてきたエリを守るよいつに展開している。

「鈴ちゃん。今すぐお兄ちゃんを連れてペリットに戻つて。今ならフイールドも消えてるし、間に合つから」

「分かつた。無茶だけはしないでよ」

「おい、鈴。勝手に決めんなよ……俺はまだ戦えるぞ……」

私はGNバズーカをお兄ちゃんの足元に撃つ。

「さつさと行け馬鹿兄貴……シールドエネルギーも粒子残量も心許ない足手纏いはハツキリ言つて邪魔なの……」

言い返せないのか、お兄ちゃんが俯く。その姿に少しだけ胸が痛くなつた。

「ほら、行くわよ」

鈴ちゃんがそうつて、お兄ちゃんを連れて行く。

「辛いですわね」

「そんな事無いよ。寧ろ、これで気兼ねなく暴れられるから」

そういうて、田の前の敵に集中する。そしてGNバズーカのトリ

ガーを引く。ピンク色の粒子が飛んでいくも、簡単に避けられる。しかも、さつきのバーストモードで粒子残量が心許ない。早々に決着を付けないと危ない。そう考えていると、敵ISは発砲。私とセシリアさんは上昇。同時に敵ISも散開。一機編成で私たちに向かう。

「ノルマは一機だね」

「簡単に言つてくれますわね。まあ、難しくはありませんけど」

言葉と共に私に向かつた一機が円を描くように動きながらビームを撃つてくる。

「そりいえば私、多対一のシミュレーションやつたこと無かつた」

そう咳きながら、ビームを避ける。そして肩のGNキャノンを発射する。それを回避するISだが、一機の内、片方が被弾。右腕が吹き飛ぶ。

「ヤバッ！？って、え？」

一瞬、グロテスクな展開を考えたが、吹き飛んだ腕の接合部に生身の部分が無かつたのだ。

「もしかして、無人機？」

そう考え馬鹿な、と考える。ISはティエリアさん曰く『地上最強の兵器であり、欠陥機』だという。確かにISは最強の兵器だが、それは人が搭乗している。という絶対条件が必要だ。人が扱わなければ最強と証明できない兵器。それは現在、地上で活躍して

いる兵器の全てに言えるだろ。

「でも、現実に考えてあのISは無人機の可能性が高い」

「無人機云々はティエリアさんに任せよう。今はこいつ等を何とかしないと」

そういうて、GNバズーカを発射。それを避ける一機の回避場所にGNキャノンを撃ち込む。先程、右腕を吹き飛ばしたISは回避が間に合わず着弾し、爆発して真っ赤な粒子を辺りに降らせる。

「Jの粒子。もしかしてGN粒子?」

そう考へてみると、生き残ったISが向かってくる。考へるのは後にしよう。

「くつ」

手強い。そう感じながら、敵のビームを避け、応戦する。だが、それもギリギリで避けられてしまつ。

「なら、ブルー・ティアーズ！！」

叫び、四基のブルー・ティアーズが一機のIISにオールレンジ攻撃を仕掛ける。だが、撃墜したのは一機だけだつた。残りの一機は中破したものの、健在である。そして敵の反撃が始まる。

「くつ……やりますわね」

こちらの攻撃を正確に避け、すかさず反撃してくる。そのあまりにも機械的な動きに本当に人が乗っているのか、と考える。すると、通信が入つた。

『二人とも、聞こえるか？』

「ティエリアさん？」

ティエリアさんから通信が入る。それを聞きながら敵の攻撃を避ける。

『どうやら敵IISは無人機の様だ』

『そんな馬鹿な！？』

「けど、それならあのIISの機械的な動きとかは説明できるよね。

それに無人機の証拠はあるんですね?』

『ああ、先程から敵IISにサーモセンサーを使って確認した』

まあ、無人機なら手加減はいらないよね。

「トランザム!—!」

言葉と共にGNドライヴが唸り、装甲が赤く輝く。

「セシリ亞さん、誘導。お願ひ」

『分かりましたわ』

詳しく指示は出さない。それでも、セシリ亞さんは私の意図を解ってくれた。私とセシリ亞さんは相性がいいのかな?

『ブルー・ティアーズ』

四基の内、一基破壊された移動砲台が一機のIISを一箇所に集める。

「フルバースト!—!」

両肩のGNキャノンとバーストモードのGNバズーカによる最大出力のビーム攻撃に一機のIISは文字通り塵に成り果てた。

『それ、実戦では使わないほうが良いですわね』

「うん、私もそう思つ

物凄く危ない。

「後は、最初に乗り込んだ奴だけだ」

眩きながらハイパーセンサーで工事を探すも見当たらない。逃がしたようだ。

「これで終わりだと嬉しいんだけど」

正直、これ以上侵入者が来ると辛い。

「取り敢えず、ブルー・ティアーズのセンサーには反応はありますわ」

『「こちらのレーダーでも敵影は感知できない。増援の可能性は低いだろう。ピットに戻つてくれ』

ティエリアさんの言葉を聞き、私たちも領きピットに向かう。その後、無断で出撃した事をお姉ちゃんに怒られた後、アンノウンを撃退したことで少しだけ褒められた。

「む~~~~~」

帰つて来たISの録画記録を見終わつて、私は唸る。

「海」――――――――――――――――――――

そう、叫んでバタバタと手足をばたつかせる。その際、腕や足が積み重なつたデータディスクを崩すが、興味が失せた物なので問題ない。

「なに、このトランザムつてシステム。ティエリ～、ズルイ～～～」

そうして暫く唸つたり叫んだりして鬱憤を晴らした後、嬉しくなる。結果は見事に惨敗だったが、見返りは中々の物だ。

「トランザムかあ～～。面白いな～」

本当に、ティエリィは飽きさせないな。うんうん、遊び心がちやんと解つてゐる。

「ティエリ～は凄いね～」

『スゴイ！！スゴイ！！』

ハロも同意してくれる。ふと、調整中のHSIに目を向ける。

「そのISにIJのシステムを付けてみよっか」

ちょっと難しいけど、それがいいよね

第9話「決戦・後編」（後書き）

クラス対抗戦終了！！！！なんか、久しぶりに戦闘シーン書いたから疲れました。そしてなにやら暗躍する束さん。では次回もお楽しみに。修正しました。

第10話「休日」

「暇だな～」

『ヒマダ…ヒマダ…』

私の呴きにて床で転がっているハロが喋る。

「さういえば、お兄ちゃんは弾さんの所に行ってるんだっけ？」

一緒に行くのを遠慮してしまったが失敗だったな～。そ、考えていると部屋のドアがノックされる。因みに速華さんは光さんと一緒に家に戻っている。

「は～い。つて、鈴ちゃん？どうしたの？」

扉を開けると鈴ちゃんが立っていた。

「その様子じや、暇を持て余してたみたいね」

「まあね～、それで何？一緒に暇つぶししてくれるなら嬉しいな

『ウレシイナ…ウレシイナ…』

私の言葉にハロが飛び跳ねる。それに少し驚きながら鈴ちゃんが頷く。

「私も暇だし。じゃあ、模擬戦でもする？」

笑顔でやう提案してくる鈴ちゃん。言わね、少し考える。

「うん、いいよ。んじゃ、先に許可申請出しどうて」

「了解、今なら第三アリーナが空いてるから、準備が出来たら来なさい」

「りょーかーい」

『リョウカイ！…リョウカイ！…』

その後、ハロを連れて第三アリーナに向かつ。

「やはり、見間違いではなかつたか」

そういうて、僕は視線をPCから外す。次いでメガネを外し、疲れた目を解す。

「まさか、貸していたハロの中にあつた『ヴェーダ』に侵入出来ていたとは、彼女の力量を測り間違えていたな」

そこでこの世界に来てから何度もかの思考に入る。あの『ELOS』との対話が終わり、刹那と僕は一度地球に戻つた。ただし、僕は宇宙にある『ソレスター・ビーアー・イング号』で事前に製造していた新しい

肉体に自分の人格とハロに『ヴェーダ』の一部を移していた筈だ。
そしてその作業が完了した後、目を開けた僕が見た物は暗い部屋で
はなく。

「ハロを抱えた幼いトオカとチフュ……か」

何故、この世界に自分がいるのか。

「此處にいたのか」

ふと、背後で声が聞こえた。視線だけ動かすと、入り口にチフュ
が立っていた。

「どうかしたのか？」

「さつき、鳳が第三アリーナの使用許可を出してきた。何でも十夏
と模擬戦するらしい」

「そうか」

「そういって、僕はPCに視線を向ける。背後でチフュがため息を
吐く。

「全く、人が折角気分転換を勧めたのに。それは無いだろ？？」

「生憎、気分転換する必要が無い」

そういうと、チフュが一際大きなため息を吐く。

「まあ、いい。それで？解析は進んでいるか？」

「彼女たちには悪いが、もう少し破片を残して欲しかつたな。そうすれば後、半日早く片付けられた」

「お前が、愚痴を言つのは珍しいな。まあ、解析は終わったのだろう？それで？」

チフュが問い合わせる。僕は身体をチフュに向け。

「非常に厄介だ」

「それは元からだろ？？」

チフュの言葉に確かに、と苦笑する。

「君には僕が未来の人間だと話したな」

「ああ、それも二百年ほど未来の」

頷く。

「そうだ。その証拠に僕は君とトオカ、タバネにハロの中にあったデータを幾つか見せた」

「確か『軌道エレベーター』に『宇宙太陽光発電システム』『三大國家の『ユニオン』『AEU』『人類革新連盟』そして戦争根絶を掲げ、あらゆる戦争行動に武力で介入する『ソレスター・ビーリング』そして彼らが所持する四機の『ガンダム』だったか」

「そうだ」

淀みなく答える彼女は流石だろ。」

「それで、それがどうしたんだ?」

「実はタバネが僕から借りたハロの中にあつたデータベースを覗いたようだ」

そういうと、チフユがとても嫌な顔をする。

「何故、そんな簡単に破られるように作つたんだ?」

「僕もそう簡単に破るような作りにはしていない」

『「そうだよ。この天才東さんでも解析に三年も使つたんだからティエリーの技術力は凄いよね。』』

そんな気の抜けた声がPCのスピーカーから流れる。見るとティエリーに新しいウインドウが映し出されていた。そこには満面の笑みで映し出されているタバネがいた。

『「久しぶりだね、ちいちゃん。ティエリーは電話するから久しぶりじゃないけど』』

「確かに久しぶりだな、東。それで?どうやってこの学園のPCに潜入したんだ?」

『「むふふ、この東さんの前ではどんなプロテクトだつて突破可能なんだよ。』』

「ふむ、ではこのＴＶ通信は削除してもいいのだな？」

『わあ～！！！！！待つて、待つて…………ティエリ～、ストップ
＼＼＼＼！それだけは駄目～！＼＼』

僕の言葉に画面に向こうで慌て始める彼女は勢い余って後ろに倒れてしまつ。その際、ディスプレイに幾つか見てはいけない物が見えた。それを見たチフユがため息を吐く。

「束。脱ぎ捨てた物は一纏めにして洗つておけ」

『わ～お。日常生活がいつくんに頼りきりのちいちゃんに言われちつた』

「何の用だ。とは今更だから言わないが、一つ聞く。どうやって僕が作ったプロテクトを解除した？あれはパスワード十一桁を三十秒毎にランダムで切り替えるため、僕でも解除には時間が掛かるのだが？」

『それは乙女の勘と愛の力だね～』

真面目に聞いた僕が馬鹿だった。

『それで、どうだった？驚いた？やつぱり束さんは凄いよね？』

まるで初めて問題が解けた子供のように無邪気に尋ねてくる束に呆れてしまう。

「そうだな。元々、僕のいた世界の機動兵器は数十メートルの大きさだ。それを等身大まで縮小し、無人機化、更には少ない資料と機

材、そしてこの短期間での擬似太陽炉の製造。実戦段階までの調整。挙げればキリが無い。全く、君は本当に凄い」

『いやー、それほどもあるかなー』

素直に褒めると、タバネは頬を赤く染め、後頭部を搔きながら照れる。

『でも、ティエリーは凄いねー。あんな隠し玉があるなんて』

「トランザムの事か？あれは保険のような物だ」

「スペックを一時的に三倍に引き上げるのが保険か？」

呆れ気味のチフコの声は無視する。

『でも、そのシステムも束さんは解析してしまったのでした。今は実験中でとても苦労しているんだよー』

「だろうな。擬似太陽炉は元々トランザムに対応できひみつ造られてはいない」

もつとも、彼女なら近いうちに完成させてしまいそうであるが。

『だよねー。じゃあ、根本から色々弄んなきゃ駄目だなー』

そういうて、自分の世界に入るタバネ。ため息を吐いて通信を切らすとマウスを動かす。

『ねえ、ティエリー？』

「なんだ？」

『束さんと一緒に造ったオリジナルの太陽炉は確か五基だよね？』

「ああ、そうだ」

『四基は束さんもどれに使ったかは分かるけど、後一基はどの機体に付けたの？』

「それは教えられないな」

『なんで？』

そう聞いてくるタバネに僕は笑つて。

「さあ、何故かな？」

『むへ、ティエリへは意地悪だね。まあ、その方が色々と楽しみが増えるからいつか。それじゃ一人ともまたね～』

そういうと、通信が切れる。ため息を吐く。

「アーツのお気に入りは大変だな」

「それは君も同じだろ？？」

楽しそうに呟くチフコに答える。

「それで？束が言っていた残りの太陽炉は何処にある？」

真剣な表情。僕は笑みを浮かべ。

「安心してくれ。僕は彼女と違つて世界と喧嘩をするような事はないさ。残りの太陽炉はまだ僕の手元だ」

それに『彼』もまだ本調子ではないからな。

第10話「休日」（後書き）

どうも、作者です。今回はティエリアの回想と束との会話でした。この作品のティエリアはE-L-Sとの対話が終わつた後のティエリアという事になつています。次回はシャルとラウラの登場。でも、他クラスの為、十夏とは接触しにくいかも。では次回の更新をお楽しみに

第1-1話「転校生二人」

桃色の粒子がビームとなり、すぐ横を通り過ぎる。避けられる速度だが、威力が高い為、もし当たつたら、という事を想像して冷や汗が出る。しかも、相手はそれを正確に撃ち込んで来ている。

「そこおおつ！！！」

ビームを避け、『瞬時加速』^{イグニッシュアシスト}で懐に入る。次いで、持っている『双天牙月』を振るつ。だが、それは若草色のバリアに阻まれる。そして相手が持つているバズーカが私の目の前に移動する。

「ツー？」

回避した瞬間、私がいた所にビームが通り抜けていった。距離を取り『全身装甲』^{フルスキン}の相手を睨む。

「その防御力と攻撃力、反則じゃない？」

喋りながら呼吸を整える。

『まあ、元々多対一の殲滅戦がヴァーチュの役割だからこれも妥当だと思うよ？』

やや呆れながら答えが返つてくる。相手、十夏も驚いていいくつだ。

「役割？もしかしてヴァーチュって複数の機体と連携して戦うよう作られてるの？」

『うん、一応ね。』といつても別に連携取らなくても問題は無いし

「心」

そういうて、肩の『龍砲』を放つ。不意打ち気味で撃つたのだが、防がれてしまう。けど、それは予測範囲内。

四二

眩きと共にビームが放たれる。それを避けながら『龍砲』を放つ。今度はバリアではなく、ヴァーチュに当たる。どうやらバリアの展開と攻撃は同時に行えないようだ。

る。立て続けに『龍砲』を連射。同時にヴァーチエを地面に誘導させ

四二七

言葉と共にビームが飛んで来るが狙いが甘いのか、さつきより避けやすい。

「行けッ！　！　！　！　！」

叫びと共に『龍砲』をヴァーチュ周围の地面に放ち、土煙を巻き上げる。即席の煙幕だが、これで十分。

「貰つた！――！」

ヴァーチュの背後。『双天牙月』を振るう。捉えた、そう感じた瞬間。

『トランザム』

十夏が呴いた瞬間、ヴァーチュの装甲が赤く輝いた。そして先程の機動を上回る動きで私の攻撃を回避し、足に内蔵してあつたビームサーベルを私の首筋に突きつける。

『私の勝ちかな？』

「ねえ、そろそろ機嫌直してよ～」

「やつぱ、ずるいわよ。あのシステム。何よ、一定時間スペックを三倍に引き上げるとか。私にも寄越しなさいよ――――――！」

「無茶言わないでよ～」

そういうて、ため息を吐く。先日の模擬戦で勝つて以降、ずっと不機嫌なのだ。どうやら土壇場で『TRANS - AM』を使ったのが原因らしい。普通に勝つてたらこれほど不機嫌になる事も無かつたのかな。

「ん？」

そんな事を考えていると視線を感じる。視線の方を見ると廊下を行きかう生徒たちの中にその子はいた。

「…………」

無言、けれどその表情は僅かな驚きと関心が表れていた。銀髪の長い髪、赤い目。左目を隠す特異な眼帯。そして鈴ちゃんと良いと勝負の身長。

「どうしたの？十夏」

「え？」「ううん。なんでもない」

鈴ちゃんの言葉に我に帰る。そして視線をもう一度その子に向けるが、その子は何処にも居なかつた。

「ま、いいが。そういうえば、一組に転校生が来たってやつを言つてたよね？」

「そうよ。で、その内の一人が男らしいの。まあ、そつちはどうでもいいんだけど。問題はもう一人よ」

「どんな子？」

聞くと、鈴ちゃんは懐のポケットからメモ帳を取り出し、ページを捲る。いろいろ情報をメモって置くのは凄いな。

「ドイツの代表候補生で名前はラウラ・ボーネヴィッヒ。じつに来る前はEIS部隊の隊長をやつてたって話よ。それと自己紹介でいきなり一夏をぶつた」

「ふ～ん、つてお兄ちゃんを…？」

私の言葉に鈴ちゃんが頷く。同時に屋上に着く。

「でも、ドイツか～。あれ？ 確か『あの後』お姉ちゃんが向かつた場所つて」

そう考へながら、歩くとお兄ちゃん、篠さん、セシリ亞さんが仲良く（？）集まつてお昼を食べていた。そしてそこには見慣れない人が居た。

「おお、十夏と鈴も来たか」

お兄ちゃんが嬉しそうに私たちのまわりに手を振る。

「ねえ、お兄ちゃん。この人は？」

私はセシリ亞さんの隣に座つて、お兄ちゃんに聞く。

「ああ、今日転校して來たんだ。シャルル、俺の妹の十夏だ」

「シャルル・デュノアです。宜しく」

「そこにはいる愚兄の妹で織斑十夏です」

そういうつて、笑いながら手を握る。はて、この人は男だと書く。

だとすれば世界で一人目のIIS操縦者だ。メディアが騒ぐのは普通なのだが。

「えっと、シャルルさんって男だよね？」

「もうだけど、どうかした？」

「いや、その割りにメディアが騒がないなって」

私の言葉にシャルルさんの笑みが固まる。

「ん？ そんなに気になるのか？」

お兄ちゃんの言葉に頷く。確かにお兄ちゃんの場合は『ブリュンヒルデの弟』という事も有名になつた一員ではある。けど、それを差し引いても世界で一人目だ。珍しさは薄くなるものの珍しいのに変わりない。私は持つてきた鞄の中からハロを取り出す。

『トオカ！－ゲンキカ！－』

「うん、元気だよ。ちょっと御免ね～」

もうじつて、ハロの後頭部に端末を取り付ける。そして操作していると鈴ちゃんとシャルルさん、お兄ちゃんが驚いている。

「もういえば、ハロを見るのが初めてだつけ？」

「それ、何？なんか、可愛いけど」

鈴ちゃんの言葉にハロが目をペカペカと光らせる。

「これはハロ。主に私の『ヴァーチュ』の整備や微調整を手伝ってくれる優れものだよ。搭載されているAIも賢いから落ち込んだときとか励ましてくれるんだ」

『ヨロシク！－ヨロシク！－』

皆がハロで和んでいたときに私はハロを使ってネットにアクセスしていた。

「う～ん、どつかで情報統制でもしているのかな～。世界で一人目の男性操縦者なんて記事。見当たらないな～」

「別にいいんじゃないか？」

「良くない！－！－！」

お兄ちゃんの能天気な言葉に思わず叫んでしまつ。ギョッとした皆を見て私は咳払いをして。

「いい？お兄ちゃんは世界で一人しかいない男性操縦者。それは科學者に言えばまたない『研究素材』なんだよ？」

「研究素材つて俺はモルモットかよ」

「まあ、モルモットよりかは希少な存在だから待遇はいいかもね。でもこの学園に転入してなかつたらお兄ちゃんは今頃どこかの研究室で研究されていたかもしれないんだよ？」

私の言葉に嫌な想像でもしたのか、お兄ちゃんが険しい顔をする。

「それに今の女尊卑男の世の中じゃ、お兄ちゃんの存在は一部の人にはとても邪魔な人なの」

「一部の人間つて？」

そこまで説明しなくちゃいけないのか、この愚兄は。

「今の世の中は女性が有利。それはISの恩恵のは分かるよね？けど、お兄ちゃんの出現でそれが揺らいだ。もし、お兄ちゃんみたいにISを使える男の人が増えたら？それを危険視してお兄ちゃんやシャルルさんを狙う人間だつているんだよ？それにお兄ちゃんの『白式・七剣』だつてまだ秘密があるんだよ。特にGNドライブなんかそうだし」

「あの動力源がどうかしたのか？」

「たとく、この兄貴はあれがどれだけ凄い物か気付いてないのか？私はため息を吐いて周りの皆を見る。

「これは最重要機密だから絶対に口外しないでね？GNドライブは量産も不可能に近いオーバーテクノロジーで出来てるの。そんなテクノロジーが詰まつたISの技術。欲しい場所なんて腐る程あるんだよ？お兄ちゃんは自分の存在がどれだけ規格外か少しば自覚して」

「あ、おう」

一気に捲くし立て、息を吐く。

「はは。大変だね、一夏」

シャルルさんがお兄ちゃんに苦笑しながら声を掛ける。それを見ながら自分の弁当を広げる。

「確かに十夏さんの言い分も分かりますわ。だとすれば、あの憎たらしいドイツ代表はもしかすれば」

「セシリアさん。それは無いよ。ドイツの転校生は白だと黙つ。お兄ちゃんを引つ呪いたのは別の理由」

「別の理由?」

篠さんが聞いてくる。私は頷いて。

「お兄ちゃん、あの『事件』は覚えてる?」

「ああ」

お兄ちゃんが苦々しい顔で頷く。

「あの事件?」

「第一回モンテ・グロッソでの決勝戦。お姉ちゃんが棄権した理由」

お兄ちゃんが誘拐されたあの事件。

「確か、一夏さんが誘拐されたんでしたつけ?」

「うん。それでお兄ちゃんの場所を見つけたのがドイツ。んで、そのドイツに借りがあるお姉ちゃんはドイツで教官をする事になった

の。多分、転校生のラウラって子はお姉ちゃんの教え子でしょ？」

「ちょっと待て、一夏。俺は千冬姉がドイツの所にいたのだってつい最近まで知らなかつたぞ。なんでお前、そんな事知つてるんだ？」

「え？ なんでつて。本人に聞いたんだけど」

「ほ、本人！？」

「とこつても、ティエリアさん経由だけね。

「でも、だとしたら何で一夏を殴る理由になるの？」

「想像していた一夏さんより現実の一夏さんが腑抜けだからでは？」

セシリアさん。地味に酷いな。私は少しだけ唸つて。何となく推測を浮かべる。

「多分、ラウラさんはお姉さんに心酔してゐんじやないかな？ そのお姉ちゃんが優勝間違いなしと言われた大会で優勝できなかつた原因を疎ましく思つてる、とか」

そういうて、お兄ちゃんに箸を向ける。

「ちよつと、それ逆恨みにもなつていないだらう――――――」

「なんか、逆恨みにもなつていないだらう――――――」

「なんですか、その理不尽の塊は――――――」

私の推測で勝手に盛り上がるのはいいんだけど、私に詰め寄るのはお門違いだよ。

「三人とも、今のは十夏の推測だよ。それが本当とは限らないだろ？」

シャルルさんが私を庇ってくれる。

「まあ、気を付けた方がいいかもね。変な因縁付けられて刺されたんじゃ、嫌でしょ？まあ、女性の嫉妬で刺されたんじゃ文句言えな」

いけど」

「つよい…………なんで女の嫉妬で刺されなきや、いけないんだよ！！！」

そういうて、お兄ちゃんが私に詰め寄つてくれる。私は食べ終わつた弁当を片付けながら。

「それくらい、自分で気付きなさいよ。朴念仁」

そういうて、私は屋上から出る。

「ドイツ代表候補生。ラウラ・ボーデヴィッヒ、君がドイツの教官時代に教えていた子だつたか？」

「それがどうした？」

「そう返しながら彼女はコーヒーを受け取る。

「いいのか？初日から問題を起こしたぞ？お陰で、何処で嗅ぎ付けてののか束からメールが来ている」

そういうて、PCを操作して彼女のメールを見せる。彼女はそれを一秒見た瞬間、目を離す。

「削除しろ」

「したや。けど、削除した途端、新しいメールが来るんだ」

そういうて、ため息を吐く。

「これはあいつ等個人の問題だ。部外者の私たちが口を出していい問題ではない」

「確かにそうだな。けど、原因の発端は君だろ？いや、もつと掘り進めば原因は彼か」

言つた瞬間、彼女の視線が鋭くなる。するとディスプレイで作業していたプログラムが終わつたようだ。

「何を作っている？」

「つい先日、トオカにヴァーチュの物理攻撃武装を頼まれたんだ。

それが完成したところだ」

そういうで、新しくウインドウを開く。そこには灰色の重装甲。巨大なバズーカ砲、腰には携行型ロケットランチャー。肩には巨大な砲塔を担いだヴァーチェが映し出された。

「これが物理攻撃に特化した『ガンダム・ヴァーチェ フィジカル』ビーム兵器を肩のGNキヤノンのみに限定し、残りの武装を総て実弾で統一し、GNフィールドの展開範囲、展開時間の延長を図ったパッケージだ」

「成る程な。これなら『白式・七剣』相手も不利にはならんだろう。それとコレだけではないのだろう?」

「全く、君は鋭いな」

苦笑し、新しいウインドウを開く。そこには追加装甲を装備した『白式』が映し出されていた。

「これは?」

「ふむ」

「高機動奇襲型パッケージ。通称『アヴァランチ』攻撃力はそのままで速度を上げたパッケージだ」

すると、なにやら考へ始めるチフコ。

「ティエリア。これの完成は?」

「ヴァーチュの方は既に出来ている。後は実戦データを集めるだけ

だ。『アヴァランチ』の方はもう少し掛かるが、臨海学校までには間に合つだらう』

そういうと、チフユは暫く考え、フツと笑みを作る。ああ、何か変な事を考えたな。まあ、この手の笑顔は僕に無害な物が多いので問題は無いだろう。

「その追加パック。早々にデータが取れそうだ」

「という事は今度のイベントか」

僕の言葉にチフユが頷くと、部屋から出て行く。僕はそれを見送つた後、コーヒーを一口飲む。すると、携帯が鳴った。

「また彼女か？」

うんざりしながら液晶を見るとトオカだった。

「どうかしたのか？」

『あ、えっと。ちょっと頼んでいいですか？』

『まあ、いちいち仕事が一段楽したからな。問題は無いが』

『ううこうと、電話の向こうが黙る。

『えつとフランスのデュノア社を調べてくれますか？出来れば此処最近の会社状況とか』

その言葉に少し考える。多分、転校生関係だらう。

「分かった。だが、僕も忙しい。少々遅れるかもしれないが、構わないか？」

『はい。ありがとうございます』

そういうて、電話を切る。さて、デュノア社だったか。

第1-2話「昔の話」

「いいか、兄ちゃんが鬼やるから隠れるんだぞ？」

「うん……！」

その日、私とお兄ちゃんは何時ものように公園で遊んでいた。物心付く頃には両親なんていなかつたけど、私は幸福だったと思う。厳しいけど強くて優しいお姉ちゃん。ちょっと頼りないけど何時も私を守ってくれたお兄ちゃん。そんな家族三人で私たちは日々を楽しく過ごしていた。その日も何時ものようにお姉ちゃんは出掛けっていて私とお兄ちゃんは近くの公園で遊んでいた。

「此処でいいかな」

そういって、私はお兄ちゃんから隠れる。今日も昨日と同じ、日が暮れるまで遊んで、家に帰つてお兄ちゃんと夕飯作つて、食べて、寝て、また明日がやつてくる。

「？」

その筈だった。

「起きた。馬鹿者」

言葉と同時にスパーク、といつ音と頭頂部の痛みで眠気が吹き飛んだ。

「うう、これで馬鹿になつたら恨んでやる……」

ズビン、ヒ田の前の、出席簿を肩に乗せている美人、お姉ちゃんを指差す。同時にもう一度頭頂部に痛みが走る。

「授業に寝ていたお前が悪い。自業自得だ」

まつたくもつてその通りです。そしてお姉ちゃんは教卓に戻る前に私の隣で豪快にいびきを掻いている速華さんの頭を叩く。

「んあつ?ーなにー?お皿?ー」

そういうて、口から垂れている涎を拭こうとしないで周りを見回す。その姿にお姉ちゃんがため息を漏らす。うわ、頬が引き攣つてゐる。

「私の授業中に寝るとは度胸だな?柿崎、織斑。お前たちには黒板の問題を解いてもらつ。制限時間は三分だ」

その後、一分半で問題を解いた私と結局問題を解けなくて課題を渡された速華さんでした。

「うう、今日は厄日だーーー！」

食堂で速華さんが叫ぶ。それを聞きながら私は焼肉定食を頬張る。

「厄日つて、授業中に居眠りするアンタが悪いんでしようが」

呆れながら、隣にいる光さんが箸で速華さんを指し示す。因みに光さんは、ざる蕎麦で速華さんはステーキだ。

「だからついこの課題は無いでしょう、普通……。」

そういうて、取り出したのは数枚のプリント。そこには数式がズラリと並んでいた。

「まあ、まあ。私も手伝つから

「一九、十夏。それは速華の鳴こないなこでしょ。自分でやりなせや、駄田なの」

そういうつて、指を立てる光さんを速華さんが睨みつける。

「まあ、本人がどうしても駄目ってんなら手伝つてあげるけど」

そういうと、速華さんは笑つて光さんに抱きつく。

「やっぱ持つべき物は友達だーーー！」

「ち、ちゅうと速華……離れなさいよ。お皿食べれないでしょ……！」

そんな一人を見ながら自分のお皿を食べ終える。

「それじゃ、私はアリーナに行ってるから」

そういうて、食堂を出る。すると、携帯が鳴った。見ると、ティニアさんからメールが来ていた。

「何だろ?」

見てみると、先日頼んだテュノア社に関する情報だった。

「彼女のようじやなかつたんだけどな～」

これは後で何か甘い物でも作ってあげよ。うん、そうしよう。
そしてメール内容はやはり、といつか悪い予感が当たっていた。

「これは少し警戒を強めたほうがいいかも」

下手すれば『また』お兄ちゃんが危険な目に遭うかもしれない。
そう思つと筋に悪寒が走る。

「そんなの駄目!…」

そうだ。あんな思いは一度で十分。一度目なんて持つての外だ。
私は悪寒を振り払つように走り出す。

「今度は私が守る番」

そう、今の私はあの時、震えて隠れることしか出来なかつた弱い人間じゃない。さう、自分に言い聞かせ、アリーナに向かう。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と戦え」

アリーナに付くとそんな不機嫌そうな声が聞こえた。見ると黒いISの少女が飛翔しながらお兄ちゃんを睨んでいる。私はオープンチャネルを開く。

「なんかいきなり修羅場だけど、どうしたの？」

『十夏か。いや、俺もよく分からぬ』

そんな困ったような口調でお兄ちゃんが返してきた。取り敢えず、私は黒のISに向かって。

「えつと、言つて置くけど。お兄ちゃんは突撃しか考えてない猪さんだから戦つても勝負にならないよ。それとも、弱い者苛めして悦に入る下衆な趣味の持ち主ですか？」

『つまーい！？確かに俺は弱いけど、その言い方は無いよなーー』

お兄ちゃんからの意見は無視する。すると黒いISの少女は私の

ほつに視線を向ける。

『お前は確か、教官の妹だつたか？まあ、お前でもいいか。私と勝負しろ』

「私としては色んな工事との戦闘データが取れるから大歓迎だけど。ちゃんとアリーナに許可是取つてね？そうしないと周りの人迷惑だから」

『それくらいは分かつていろや』

『そういうと、少女はアリーナの責任者に模擬戦の許可を取つている。私はその間にお兄ちゃんたちの方に向かつ』

「おい、十夏！…あんな奴と戦つ」となんて無いぞ…』

『もうよ……アイツ単に自分が強いつて誇示したいだけじゃないの』

『もうだらうね。でもさ、私もちょっと頭に来る所があるから』

『うううううう。笑い。ワードヒュを起動する。

『まあ、見ててよ。何時までもお兄ちゃんに守られるような私じゃないから』

『うううう、飛翔する。

『取り敢えず、学年別トーナメントも控えているし、程々にじょうね』

『別にそつ心配することも無いだらう』

そういうて、笑みを作る少女。彼女が動いた瞬間、私は右に素早く移動する。同時に私がいた所に銃弾が轟音と共に通り過ぎる。

『機体が大破すればトーナメントの事も気にせずにすむ』

その言葉と共に左肩に備え付けられた巨大な実弾砲から次々と銃弾が解き放たれる。それを私は最小限の動きで避ける。

『フツ、流石は教官の妹だ。良い動きをする』

「お姉ちゃんを引き合いで出すのは止めてくれないかな。それと私は織斑十夏という名前があるの。悪いけど、お姉ちゃんやお兄ちゃんの類似品みたいな扱いは止めてくれる?」

『そういうて、肩のGNキャノンを発射する。それを避ける少女の回避コースにGNバズーカを放つもギリギリで避けられる。』

『火力が高いな。それにその機動性で良く動く。中々やるじやないか』

「それはどうも」

『そういうて、威力を抑えたGNキャノンを撃ち接近する。』

『成る程な』

私と少女は互いに向かい、お互の武器を構えた状態で静止する。動きを止めた理由は相手の少女から戦意が消えたことだ。その

少女は驚きと感心の笑みを浮かべていた。そして彼女はゆっくりと肩の実弾砲を待機状態に移行する。

『気が変わった。織斑十夏、お前はトーナメントで倒すことにある』

「それは有難いな。変に傷つけて整備に時間掛けるのも嫌だし」

正直、このまま続けても勝機は薄いだろう。相手は動きを見るからに一流。更に奥の手を隠している。まあ、奥の手を隠しているのは私もなんだけど、それでもその奥の手は最終手段であり秘匿すべき物だ。早々に見せるものでは無い。

「トーナメント。楽しみにしていた方がいいかな?」

『ああ、楽しみにしているといい』

そういうって、少女はEDを解除してアリーナゲートに向かっていく。私もヴァーチュを解除して身体を軽く伸ばす。こんなに緊張したのは久しぶりだ。

「十夏!!」

お兄ちゃんが駆け寄ってくる。

「大丈夫か? 怪我とか無いか?」

そういうって、私の身体を見る。それに呆れながら。

「大丈夫だよ。もつ、お兄ちゃんは過保護過ぎ」

もう少ししその気遣いを他人に分けてやればいいのに。

「それにしても、惜しかったな。もう少し早ければお前の勝ちだったのに」「

そういって、笑うお兄ちゃんにため息が出る。

「それ、本気で言つてる？あの子、まだ何か隠してたよ？」

「え？ そなのかー？」

そういって、驚く。そして後ろに控えている旨に視線を向けると。

「つむ、あのワカラといつ少女は確かに何か隠していたな

「どんな代物かは分かりませんけどね。まあ、厄介な物でしょうね

「アーツも十夏の実力を測りたかったみたいだし。余裕そうな態度
が癪だけど」

「でも凄いね、十夏は。あの砲撃をあの機動性で避けきるなんて」

最後のシャルさんだけ私の操縦を褒めてくれた。

「そ、うかな？まあ、ティエリ亞さんが組んでくれたショミーレータの
経験があるから、それのお陰かも」

「ショミーレータ？」

頷く。以前、暇つぶしにティエリ亞さんが組み立てたEIS用の

実戦シミュレータだ。大きさは個室トイレの大体3倍位。中にある端末に待機状態のICSを接続してバーチャル空間でのシミュレーションだ。

「シミュレーターも色々あってね。地上、空中、砂漠、何処かの軍事基地、海上、水中、果ては宇宙空間まで何でもあり」

しかも、内容は決まって五機以上の編隊を組んだMS戦。中には戦艦や空母などもあり、殆ど多対一の戦闘を強いられる。勿論、他のシミュレータを通して複数の人間と連携も出来るが、いかんせん戦力差がありすぎる。そして内容の殆どが人型兵器との戦いだった。

「結構、驚くことも多いけどしっかり作られてるし、いいトレーニングにもなるよ」

此処までの難易度を作るのに苦労したのでは?と本人に聞くとティエリアさんは苦笑して。

「苦労、といっても。僕が経験したミッションそのまま、インプットしているだけだが?」

そういうてきた。その時、啞然とした自分を思い出し、恥ずかしくなる。そしてそれ以上にティエリアさんの戦闘経験に驚かされる。

「今度臨もやってみたら?..」

といつても、人数分作り終えてないだらうけど。

真っ暗な闇の中を駆ける。レーダーを見れば、もつ少しで目標を見つけられる筈だ。すると、視線の先に目的の物が現れた。

「アレ……か」

それは青を基調とした装甲に身を包んだ人型の兵器だった。両肩から戦闘機のような装置が背中まで装備されている機体で若草色の粒子が両肩から溢れ出ている。私はそれを見た瞬間『イグニッシュギアシステム瞬時加速』で接近。右手に持っているブレードを振るも相手の右手に装備されている物に阻まれる。それは一見小さな盾に見えた。だが、その盾にはブレードが取り付けられていた。相手は私の剣を軽々と弾くと距離を取り、そして盾に備え付けられているビーム兵器で攻撃していく。

「チツ……」

軽く舌打ちし、回避に専念する。反撃は考えていない。否、反撃する機会が無いのだ。まるで私が回避する場所を先読みしているかのようにビーム兵器が飛んでくるのだ。避けるので精一杯だ。

「だが、甘い！……」

叫びと共に駆け、斬り付ける。相手もライフル形態からソード形態に変更して私に合わせる。まるで接近戦の方が得意と言わんばかりに。気付けば自然と笑みを浮かべていた。

「ハアッ！――！」

裂帛の気合と共に繰り出される一撃を相手は難なく受け、反撃していく。それを受け流し、又は避けながら反撃する。

「くうつー？」

重い一撃を受け、後ろに下がり背後についた三メートルほどの岩を足場に相手の真上から攻撃を仕掛ける。だが、そんな奇抜な攻撃にも相手は対処してきた。

「まだ、まだ！――！」

言葉と共に加速する。そのまま、相手と共に高機動の接近戦を行う。岩以外何も無い真っ暗な空間に若草色の光が跳ねるように交差し、交差する度にオレンジ色の光が飛び散る。

「くうつー！」

何度も目か分からぬ剣戟を重ね、体勢が僅かに崩れる。そこに相手が追撃を仕掛ける。

「やはりなー！」

笑みを浮かべ、加速。私は半円を描くように相手の後に飛び、そこについた岩を足場にして相手の背後に向き直る。

「悪いが此処は――私の距離だ――――！」

叫びと共にブレードを突き出す。見れば相手の装甲が赤く輝いて

いたが、この距離ではどつする」とも出来ない。ブレードはそのまま吸い込まれるように相手に突き刺さる。

「なんだ？」

ブレードは根元まで突き刺さった。そう『なんの抵抗もなく』突き刺さつたのだ。刺した感触さえ無い。疑問に思つたのも一瞬、答えは驚きと共に現れた。

「なん…………だと?...」

田の前、ブレードに突き刺された機体が細かい粒子となつて消える。そしてE.Sのアラームが鳴る。警告先は背後。

「つー?」

背後を見ると、今正に長大なブレードを振り被つている相手が見えた。そして腹部に衝撃が走り、周りが完全な闇に変わつた。

「…………」

一度、深呼吸して気持ちを落ち着かせシミュレーターを出る。だが、足元がふらつく。

「大丈夫か?」

声と共に身体を誰かに抱き抱えられる。視線を上げるとそこにはティエリアが立つていた。

「ああ、もう大丈夫だ」

そういうて、近くの椅子に腰掛け背を預ける。ふと、時計を見る。時刻は五時。確か仕事が完全に片付いたのが三時でその後、ティエリアを訪ねたのが三時半。という事は一時間半もシミュレーターでトレーニングをしていた事になる。集中し過ぎで体力をかなり使つていたらしい。

「ティエリア。アレはなんだ？」

が、今は時間や体力など気にならない。気になるのは先程の戦い。最後の一手、相手のI.S（この場合はMSと呼ぶべきか）が粒子となつて消えたのだ。

「アレは『量子化』一定空間内に一定量以上のGN粒子がある場合のみ、発動する。あの機体とパイロットのみに許された能力だ」

それを聞き、最初に思ったのは呆れ。

「馬鹿げているな。何故、量子レベルに分解、再構築された人間が生きている」

「それは僕も疑問だ。だが、僕はアレを確立事象の一種だと捉えている」

確立事象？聞き慣れない言葉にティエリアを見る。ティエリアは一度「推測だが」と前置きを置いて。

「アレはGN粒子を介して『攻撃を受けた場所』の自身を非実在にし『攻撃を受けなかつた所』に移し変えるものだつ」

「そんな事可能なのか？」

ティエリアの言っている事はイマイチ解らない。だが、それは簡単に出来るものなのか？

「勿論、簡単に出来る代物ではない。あれが出来たのは例外中の例外。先ず、機体である『OOライザー』の『ツインドライヴシステム』による高濃度のGN粒子化にあつた事。そしてその『ツインドライブ』を装備したOOライザーのトランザムによる恩恵。そしてイノベイター、純粹種として覚醒した刹那・F・セイエイの能力があつたからこそだ」

「ではその条件なら十夏も可能なのか？」

私の質問にティエリアは首を振る。

「一口にイノベイターといつても本質は人間と同じ。それぞれ得手不得手がある。トオカでは例え刹那よりも好条件の状況でも『量子化』は不可能だろう。『量子化』が可能なのは刹那一人だろう」

言われ、息を吐く。全く、ティエリアの世界の人間は桁外れだな。あの緑の機体の精密射撃といい、オレンジ色の変形機体の機動性といい。

「まあ、昔のデータ。それも純粹種に覚醒した初期の刹那のログラムに過去の『暮桜』のデータで挑んでこの結果だ。もし君が僕たちの世界で敵だったらと思うとゾッとする」

そういうて、ティエリアは私に小型端末を渡す。そこには先程まで行っていたシミュレーターの成績が載っていた。

「全く『対ガンダム戦』それも一対一とはいって、ガンダムに勝てる人間はそうそういないのに」

「対ガンダムやオーバーフラッグスの相手は流石に苦戦したぞ？」

「苦戦で済む君が可笑しいな。それでどうだい？データ上とはいえてライザーと戦った感想は？」

聞かれ、私は笑みを作る。

「決まっている。接近戦で負けたのだ。悔しいに決まっている」

そういうて、立ち上がる。

「時間は大丈夫か？」

「なに、もう一戦だけだ」

私の言葉にティエリアが笑みを浮かべる。

「全く、負けず嫌いな所は変わっていないな」

そういうて、システムを立ち上げる。私はシミュレータの中に入る。

『先程の戦闘で『暮桜』を現在の君に調整した。先程より戦いやすいだろう』

その言葉と共に私の視界が変わり、見渡す限りの青に変わった。

じつやら今度は海上での戦闘らしい。ふと、視界の先では〇〇ハイザーが悠然と浮遊していた。私は笑みを浮かべ。

「わあ、リベンジと行こうかーーー！」

加速し、一気に距離を詰める。

第1-2話「昔の話」（後書き）

いつも作者です。今回はラウラと十夏の模擬戦とOOライザーと千冬さんとのガチバトルでした。そして量子化についての説明は作者のアドリブです。そしてOOライザーに惨敗する千冬さん。流石に量子化できるOOライザーに勝つのは無理だろう。こういう事でこんな感じです。それでは次回もご期待ください

第1-3話「タッグパートナー」

「ええええええつ？！」

廊下に叫びが木靈する。私は耳を指で塞いで至近距離の叫びを防ぎながらため息を吐く。

「因みに拒否権は無いぞ？」これは決定事項だ

「だからって、何で私がラウラさんと組まないといけないの？そんなのお兄ちゃんに丸投げすればいいじゃん！－！」

「一夏では余計に駄目だろうが－－！」

声を上げ、つい出席簿で殴つてしまつ。一夏は殴られた箇所を摩りながら。

「それなら私だって同じじやん。ていうか、なんで私が組まないといけないの？」

「まあ、言つてしまえば消去法だ。ラウラ自身、此処の生徒とはまだ会つて間もない。そんな状況でこの行事だ。タッグを組む以前の問題だろつ。それにラウラは専用機持ちだ。汎用機の人間とタッグを組ませては意味が無いだろつ？」

「まあ、確かにそうだけど。なんで私なの？」

「先ずアイツとタッグを組めるほどの人間をピックアップした。だが

「もしかしてそれって鈴ちゃんとセシコアさん？」

頷く。

「まあ、第一印象最悪の人間と組め、なんて無理だよね～」

「やうこつ事だ。諦める」

「やうこつとい、十夏は諦めたよつに返事する。

「えじや、私はこの事をワカツルで伝えてくれるから」

「済まんな。何時もお前には損な役回りを任してしまひ」

「えうこつと、十夏が笑つ。

「大丈夫だよ。もう慣れつこだし、家族だもん、代わりに思いつき
り我儘聞いてもらつからね？」

その言葉を聞いて、思わず笑つてしまつ。

「分かつた。その時はなんでも言つ事を聞いてやる」

「おっし。言質取つたからね……んじゃ、失礼します。千冬先生」

そういうと、十夏は一組の教室に向かつた。

「良かったのか？」

「盗み聞きとは、何時の間にか趣味が悪くなつたな。ティエリア

背後からの声に視線は向けず、柱に背を預けて告げる。

「僕は通りかかつただけで別に会話の総てを聞いているわけではないさ。それで本当に良かったのか？」

「愚問だ。十夏の性格は私が一番良く知っている

「僕が聞いているのは先程起きたアリーナでの一件だ。その時のこと教えなくていいのか？」と聞いているんだ」

「…………待て」

私は視線だけティエリアに向く。

「教えていなかつたのか？」

「当たり前だ。その時、彼女はシミュレーターで訓練していたし。それに僕も付き合っていた。どうやってそれを知る事が出来る？」

思わず、ため息を吐いて額に手を当てる。

「後で教える

「その方がいいな。それと

そういうて、ティエリアがUSBメモリを取り出す。

「先程、山田先生から預かっておいた。今日中に仕上げて欲しいそ

うだ

そういうで、私にしっかりと手渡す。

「ティエリ亞。わざとせつていなーいか?」

「僕は至つて真面目だが?」

そういうで、背中を向けるティエリ亞の肩をがっしり掴む。

「手伝え! !

「断る。僕にも色々と仕事がある。ソレは君の

「ええい! ! ツベコベ言わづ、手伝え! ! ! そつだ、直接手渡さなかつた山田先生も手伝つてもらおう。うん、その方が良い! ! ! !」

「待て、チフコ。落ち着け

「何を言つてこら。私は落ち着いているぞ? お、山田先生。そこ
にいたか! ! !」

「ひいっ? !

何をそんなに去えているんだ? まあいい、今は時間が惜しい。

「私がお前とタッグを組む、だと？」

「うふ、セウラじいね。因みにお姉ちゃんが進言したみたい」

「教官が？……………そつか、なら私に異論は無い」

そう言われ、ホッとする。そして私は制服のポケットから小型の端末を取り出す。

「はい、ヴァーチュのデータ」

「…………」

無言で端末を受け取り、データを見るラウラさん。暫く、端末を操作する音が教室に響く。

「成る程、中々の機体だな。それで？」「うちの『ファイジカル』という武装は？」

「あ、こつちーじーちは物理兵装に切り替えたバージョン。主に攻撃力はそのままにエネルギー効率に重点を置いた兵装だね」

「ふむ、当田はどうちのパッケージを使うんだ？」

「ファイジカルの方だね。実戦テストも兼ねるみたいだから」

やうじうじと、ラウラさんが顔を覗める。

「それは構わんが、実戦で初めての武装を使うのは得策ではないな

まあ、正論だよね。

「それは分かつてゐるよ。取り敢えず、当日までの間はフィジカルに慣れるよう訓練するつもり」

「だが、場所はどうする？ そう都合よくアリーナが空くとは思えんが」

「ああ、それなら大丈夫」

私が胸を張つて答える。

「シミュレーターがあるから」

教官の妹に連れてこられた場所は I.S の無数にある整備室の一つ
だった。

「ティエリアさん？ あれ、いないみたい。まあ、大丈夫だよね～」

そういうて、教官の妹は部屋に入ると、手招きする。ビツやらへつていいようだ。

「ほつ、研究室も兼ねているのか

「うん、私には分からぬるものも幾つかあるから勝手に触らないけど」

そういうて、部屋の中心。三メートル位の黒い塊が一つ置いてあつた。それに触れようとした瞬間、視界の隅で何かが動いた。

「つー？」

反射的に懐のナイフを掴み、振り返る。そこにあつたのは。

『ゲンキカ！－ゲンキカ！－』

「な……んだ、これは？」

「ん？ああ、ハロだよ」

「ハロ？」

『ハロ！－ハロ！－』

ハロと呼ばれた球状の物体は私に向かって飛び跳ねる。思わず受け止めてしまう。

『ゲンキカ！－ゲンキカ！－』

私の腕の中でハロはペカペカと目を光らせて、頭の横に付いている羽（？）を動かす。何処と無く可愛らしい。

「ハロはね～、ティエリアさんが作ったロボットで。端末を付ければそこらへんで売ってるよりも性能が良いんだよ。それにね、ハロを介してHSの整備をすると意外に捲るし」

「なに？ ハロはHSの整備も出来るのか？」

驚いて聞き返す。彼女は何やらコンピュータを操作している。

「うん。自分のHSデータをハロにインストールすればOKみたい。けど、HSのデータ容量って結構多くてや、HS一機にハロ一機で感じで少しコストが掛かるんだ」

「それでも小型ロボット一機に収まる様に作れるのか？」

私の疑問にハロはペカペカと目を光らせる。何故だらつ、物凄く撫でたい。そう思った瞬間、先程の黒い塊から音が聞こえる。

「よし、起動出来た」

そういうて、彼女は黒い塊の中に入る。

「ほらほら、ラウラさんも入って」

「あ、ああ」

少し躊躇したが、ハロを床に降ろしてから中に入る。中は意外と広く、田の前に何かをはめ込む台がある。

『聞こえる？』

「ああ、問題ない」

横合いから通信が来た。どうやら壁一枚隔てて彼女がいるようだ。

『んじゃ、シリコーラーの簡単な説明するね？先ず、待機状態のISを目の前に置いてくれる？そつすれば機械が勝手にISの情報を読み取ってくれるから』

言われたとおりに待機状態の『シユバルツェア・レーゲン』をはじめ込む。すると、目の前が急に映像を映し出す。そして映像はPCの画面のように変わる。

『それじゃ、ミッションを選択しようか。先ず場所は渓谷。ほい、ラウラさん。好きな相手選んで、画面をタッチすれば機械が認識するから』

そう言われた瞬間、画面に三つの顔写真が現れる。私は顔写真の人物を見る。一人は赤髪の軽そうな男。一人は壮年の男性で左目に傷が付いている。最後の人物は金髪の青年だ。私は特に考えず、金髪の青年の顔写真にタッチする。

『はいはい。ええっとお相手はユニオンのフラッグファイターズだね』

声と共に周囲全体が変わる。

「ほお、本格的だな」

周囲が様変わりしていた。場所は先程、彼女が設定した渓谷だった。そして何時の間にか私はISを起動した状態で空中に浮かんで

いた視線を横に動かすと『ヴァーチュ』を起動した彼女が同じく浮かんでいた。

『ISの動かし方は同じだから試しに動かしてみて

「ああ」

短く答え、ISを動かす。本当に動かし方は同じで驚く。そしてハイパーセンサーが前方の機体を捉える。黒い戦闘機の様な機体が十一機、編成を組んで飛んでいる。

「あれがオーバーフラッグズとやらか？」

『データ送るね』

そういうて、ハイパーセンサーに『オーバーフラッグ』のデータが送られる。どうやら可変機の様で戦闘機から人型になれるらしい。「成る程、スペックを見る限り、そこそこ相手らしいな」「気をつけたまえ。隊長機はかなり出来るみたいだから

そういうと、彼女は肩に備え付けられた大型のキャノン砲からビームを放った。それは真っ直ぐ目標に突っ込むが回避される。

「では、お手並み拝見と行くか」

眩き、ISを加速させる。

「うと、こう相手が速いと補足しにくいな」

咳き、脚部装甲に内蔵されているGNミサイルを発射する。最初の一撃の後、ラウラさんと一緒に戦闘に入り、オーバーフラッグの数を徐々に減らし、残り三機までに減らしたのだ。ラウラさんは隊長機と一緒に打ちをして私が残りの一機を相手にしているのだが、はつきり言つて厄介だ。この一機驚くほどに息が合つている。今もミサイルを背後に引き付けていた一機が同じくミサイルに背後を取られていて、味方機を助け、助けられた味方機は減速しながら旋回、助けてくれた機体の後ろにあるミサイルを撃ち落す。その作業が流れている間に、味方機は減速しながら旋回、助けられた味方機は減速しながら旋回、助けてくれた機体の後ろにあるミサイルを撃ち落す。その作業が流れている間に、味方機は減速しながら旋回、助けられた味方機は減速しながら旋回、助けてくれた機体の後ろにあるミサイルを撃ち落す。その後ろからもう一機のオーバーフラッグが放つたミサイルが飛んで来た。

「うわあっ！？」

驚き、私もGNビームサーベルを抜いて、鎧迫り合いに入る。だが、突撃した機体は直ぐに離れる。同時にその後ろからもう一機のオーバーフラッグが放つたミサイルが飛んで来た。

「うわあっ！？」

後ろに下がりながら、バズーカで迎撃する。そして一機は私を挟むように飛行する。何時のか間にか突撃していた機体も戦闘機状態になっていた。

「ここの、いい加減にして……！」

叫び、バズーカで左、肩のGNキャノンで右のオーバーフラッグを狙うが、間一髪で避けられる。そして一機の内一機が直ぐ目の前を通る。

「先ず、一機」

呴くと同時に通り過ぎた一機が真っ二つに切り裂かれ、爆散する。右手には先程抜いていたビームサーベルが握られている。そして残り一機にミサイルを放つ。オーバーフラッグはすぐさまフレアやチャフでミサイルを誤魔化しながら、飛行する。

「そこおつーーーーー！」

叫び、バズーカを放つ。砲弾は弧を描きながらミサイルから逃れるオーバーフラッグに着弾。そして着弾したことにより減速した瞬間、ミサイルに追いつかれ、爆散する。

「ふう、慣れない装備で戦うのってキツイなー」

息を吐き、視線をラウラさんの方に向ける。どうやらまだ戦っているようだ。

「くつ！？」

オーバーフラッギの攻撃を受け流し、反撃するが。軽々と避けられる。『じりやう』の隊長機、かなりのエースだ。

「だが、負けん！！！」

イグニッシュアームズ

叫び『瞬時加速』で後退する。一瞬私を見失つて出来た隙に肩のキャノンを放つ。だが、相手は右手を犠牲にしながらも回避する。

「くつ、しぶとい……！」

悪態を吐きながら動く。先程まで私がいた位置に正確な射撃が叩き込まれる。

「くつ、奴は左利きなのか

新しい発見を頭の隅に追いやり、迫り来る弾丸を回避する。そして同時に砲撃を放つが、避けられる。『じりやう』の短い戦闘で私の発射タイミングや癖を見抜いたようだ。

「凄いな。あのパイロット」

思わず、賛辞の言葉を漏らす。そして同時にオーバーフラッギに横合いから砲撃が飛んで来た。

「随分と遅かつたな」

『遅刻の理由、聞く？』

「いや、いい。援護を頼む」

『了解』

言葉と共にミサイルがオーバーフラッグに殺到するが、相手はまたも軽々とミサイルを撃墜する。だが、ミサイルに集中している今がチャンス。

「十夏……！」

『了解……！』

私の叫びに十夏が言葉と砲撃で応える。ミサイルの中を縫うように放たれた砲撃をオーバーフラッグは辛くも回避。だが、左足がやられバランスが崩れている。そこに砲撃を放つ。バランスが崩されたオーバーフラッグは砲撃から逃れられず、爆散する。

「はい」

「ああ」

シニコレータから出た後、近くの自動販売機でミネラルウォーターを買ってラウラさんに渡す。私たちはミネラルウォーターを飲み

ながら一息つく。

「強かつたね~」

「ああ

「お姉ちゃんはあれにノーダメージで勝つたって言つてたね~」

「教官なら当然だな

「でも、お姉ちゃんでも負けた相手がいるみたいだね~」

「何つ!?

私の言葉にラウラさんが反応する。私は足元で転がっているハロを拾い上げ、端末を取り付け操作する。すると、ハロの目が光り、壁に映像を映す。

「これが、教官が負けたといつ?」

「うん、その名も『ダブルオーライザー』今の所、三戦三敗中だつて」

私の言葉に絶句するラウラさん。まあ、私も聞いた時は驚いたな。

「これと戦つ」とは出来るか?」

「出来るけど、一定以上のミッションクリアが条件だからまだ無理だよ」

「そうか」

そういうって、彼女はミネラルウォーターを飲む。

「十夏、明日から放課後はシミュレータを使うのか？」

「そのつもりだよ」

「分かった。では明日、放課後になり次第、直ぐにシミュレータで訓練だ。新しい装備に慣れるのも速いほうが多いだろう」

「そうだね」

「そういうて、私は立ち上がる。彼女も立ち上がり、飲み干した缶をゴミ箱に入れる。

「そうだ、ラウラさん」

「なんだ、十夏」

私は抱えているハロをラウラさんに渡す。

「このハロ、まだエリーテークを入れていない奴なんだけど。良かつたら使う?」

「良いのか?これはティエリアという人物が作ったものなんだろう?」

「?」

私は頷く。

「けど、色々な人に使ってもらつたほうが改善点なんかが出てくると思うんだよね。その意味では何人かに使ってもらつたほうがいいと思つて」

現に速華さんと光さんにハロは渡しているし（お陰で私の部屋には四体のハロが飛び跳ねている訳だけど）。ラウラさんは少しの間、ハロを見て、オズオズとハロを受け取る。私は笑つて。

「それじゃ、明日までにもう一機のハロも用意しておくから。それじゃ、また明日」

「ああ」

私は受け取つたハロと見詰め合つているラウラさんを見た後、自分が部屋に戻る。そういうば、ラウラさん、さつきから私の事名前で呼んでたな。ちょっとは親しくなれたのかな？

第1-3話「タッグパートナー」（後書き）

いつも、更新が遅くなつたフィロです。今回は十夏とタッグを組むことになつたラウラとのシミコレーションです。相手はグラハム率いるオーバーフラッグズ。十夏の相手はハワードとダリルの二人。ラウラはグラハムと戦いました。多分、我等がグラハムさんならI-S相手でも互角に戦えるだろうな~と考えてこんな感じにしました。そしてハロの可愛さに気付いたラウラ。では次回もご期待ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4716t/>

双子の妹は純粋種!?

2011年8月22日21時06分発行